
北陸小児糖尿病サマーキャンプ 40周年記念誌

～ Since 1975 to 2014 and Forever ～



北陸小児糖尿病サマーキャンプ 40周年記念誌編集委員会

目次

・ 巻頭のことば	……	1
北陸小児糖尿病サマーキャンプ運営委員会代表		
稲垣 美智子	金沢大学医薬保健研究域 保健学系	
笠原 善仁	かさはら小児科	
・ サマーキャンプ 40 周年によせて	……	3
馬淵 宏	医師 金沢大学名誉教授	3
小泉 順二	珠洲市総合病院内科	4
小泉 晶一	元金沢大学小児科教授	6
永井 幸広	ながい内科クリニック	7
丸山 博昭	丸山こどもクリニック	8
小野 ツルコ	看護師 元関西福祉大学大学院看護学研究科教授	9
天津 栄子	NPO 法人いしかわ在宅支援ねっと	12
黒梅 明	DM 協会 株式会社グッドステーション	13
真田 弘美	看護師 東京大学大学院医学系研究科 老年看護学・創傷看護学	14
川島 和代	石川県立看護大学	15
多崎 恵子	金沢大学医薬保健研究域保健学系看護科学領域	17
松井 希代子	金沢大学医薬保健研究域保健学系看護科学領域	19
村角 直子	金沢医科大学看護学部看護学科	21
堀口 智美	金沢大学医薬保健研究域保健学系看護科学領域	22
浅田 優也	ボランティア 日本赤十字豊田看護大学	23
藤田 結香里	金沢大学附属病院	24
丸山 育子	福島県立医科大学看護学部看護学科	25
中川 さとの	京都大学医学部附属病院	26
杉本 洋	新潟医療福祉大学健康科学部看護学科	27
西村 昭信	OG 父	28
松本 泰輝	OB 金沢市消防局	29
原井 伸子	OG 薬剤師	31
光田 雅人	OB 合同会社 M-project 訪看リハビリステーションいまひら	33
山崎 照尚	OB 自動車整備士	35
・ サマーキャンプ 40 年のあゆみ	光田雅人 (編集担当)	…… 36
・ 創立記念式典より	原井伸子 (編集担当)	…… 48
サマーキャンプ 30 周年記念式典によせて		48
サマーキャンプ 40 周年記念式典によせて		57
・ データで見るサマーキャンプの 40 年	光田雅人 (編集担当)	…… 60
開催地&内容 編		60
参加者・ボランティアスタッフ 編		68
サマーキャンプから生まれた研究論文 編		70
インスリン・血糖検査の歴史 編		73
・ 写真でつづるサマーキャンプの 40 年		…… 78

巻頭のことば

ごあいさつ ～サマーキャンプ40周年にあたり～

北陸小児糖尿病サマーキャンプ運営委員会・代表

稲垣 美智子（金沢大学医薬保健研究域 保健学系）

笠原 善仁（かさはら小児科）

北陸小児糖尿病サマーキャンプは、当時の日本糖尿病協会石川県支部理事長・興村博人氏の“北陸の1型糖尿病の子供たちにサマーキャンプを開催したい”とのご提言により、事務局のある城北病院、高松弘明高松医院院長、金沢大学附属病院医師（当時）の早川浩之先生、馬淵宏先生、金沢市立病院副院長

（当時）沢田大成先生方が発足の労をとられ、昭和50年（1975年）に、日本では第9番目、北陸における第1回開催となりました。その後、昭和54年（1979年）金沢大学医療技術短期大学部教員（当時）小野ツルコ先生、天津栄子先生方が事務局を引き継ぎ、さらに昭和62年（1987年）には私達（笠原、稲垣）が代表として引き継ぎました。このように引き継がれてきたキャンプは、毎年1度も欠かすことなく継続して開催することができ、平成26年度をもちまして40周年を迎えました。この間、多くの方のご協力をいただいたからこそ繋ぐことができた実感いたし、心より感謝申し上げます。

また、ここに40周年記念誌を発行できることは、20年来の希望でしただけに慶びにたえません。キャンプの歴史が長くなるほど、関係する人は変わり、キャンプの設立や継続

にまつわる様々な出来事や精神を繋ぐ“語り部”の役割をしてきた人も少なくなりました。また記録物も大量になっていき、エピソードも含めたキャンプの全容が見えなくなる可能性も危惧されます。

これまで、30周年記念誌を作る計画もありましたが、編集にかかわる人的な条件と資金源の問題もあり実現できませんでした。今回の発行につながりましたのは、“サマーキャンプ基金”という制度に賛同された皆様のご寄附によるところも大きいものです。深謝申し上げます。また、辛抱強く資料を集めや編集作業をしてくださったOB・OGの光田雅人氏、原井伸子氏を中心としたポストキャンパーの皆様、また多崎恵子先生をはじめとする金沢大学医薬保健研究域保健学系の教員の方々のご支援によるところが大きく重ねて感謝申し上げます。長くキャンプを開催してきました私達にとりましては、OB・OGが加わり、これまで支えてくださった方々のご支援でこの記念誌を発刊できますことは、キャンプ継続の基礎ができたことの安堵と、未来に向けた希望を感じることが出来る喜びでもあります。

この40年間、小児糖尿病を取り巻く環境は、治療方法や周囲の認識において変化をし

てきました。1日1回、注射器によるインスリン注射であったころは、インスリンをバイアルから注射器に正確に注入することから始まり、細かな動作を覚えて、注射を安全に1人で打てることが大きな目標でした。注射針も太く、注射を打ち終えた安心もつかの間、次は食べることができる食事がどうかを心配しながら見守っていました。キャンプを始めたころは子供たちが修学旅行などの学校行事に参加できなかったということも聞きました。近年では、インスリンの種類も豊富になり、注射方法も大きく変わりました。それに伴い学校行事に参加できない子供さんはほとんどいません。しかしその一方、毎日の注射も血糖測定も不要となったわけではありません。低血糖もまだまだ起こらないわけではありません。周囲に自分と同じ人がいることがめったにないことも変わっていません。根本的なことは変わっていないとも言えるでしょう。18歳になってからの医療費の問題は、医療が高度化すれば益々重くのしかかってきます。この問題についても今後キャンプがどのようにかかわっていくかの検討が必要でしょう。

北陸のキャンプは、小児科、内科、眼科、歯科の医師、看護師、栄養士、薬剤師、教師など様々な職種が、所属や勤務地の垣根を越



えて参加しています。また、金沢兼六ライオンズクラブからは、創立当初から単なる資金援助にとどまらず“社会が1型糖尿病を理解していただくように”との強い思いを込めたご支援をいただいています。石川県糖尿病協会も一丸となり支援してくださっています。このようにさまざまな人たちが組織されたキャンプの運営は全国でも他に類をみません。さらに、素晴らしい学生ボランティアのみなさんに支えられています。この人たちがいなければ毎年のキャンプは成り立ちません。これらは、北陸キャンプの誇りです。

これまで、私達は、子供も親も学校での生活を不利益なく送ることができるよう学校の先生の参加を呼び掛けたりなど、その時々課題に取り組んできました。キャンプでしか体験できないことのチャレンジもしてきました。これからも、このキャンプが繋がれていくことを心から願いますと共に、私共も精いっぱい努力をいたしたいと思っています。皆様方からの変わらないご支援をお願いいたします。



サマーキャンプ 40 周年によせて

北陸小児糖尿病サマーキャンプを始めた頃の思い出

金沢大学名誉教授

馬淵 宏

北陸でも小児糖尿病サマーキャンプを始めましょうか」と高松先生からご提案があり、「ぜひ始めましょう」と、早川先生、小野先生、その他多くのスタッフが集まって、打ち合わせをしました。懐かしいスタッフや患儿とご家族の顔が走馬灯のごとく思い浮かんできます。全国のサマーキャンプの中でも5本指に入るくらいの早いスタートで、手探りの準備と運営が続きました。以来、もう40周年をむかえたのですね。特に印象に残ることは2つあります。

一つは、スタッフが緊張して参加しており、子供たちと同様にきっちり規則に従っていま

した。飲酒や間食はなく、滑稽なくらい真面目なキャンプ生活でした。

もう一つは、お母さん方との懇談で、「子供の病気のことを最初に知ったときは子供を抱いて病室の窓から飛び降りようかと思ひ悩んだ」と聞かされた時でした。

その後、皆さんはどんなに立派に成長されたかお会いしたいものです。小野先生の歩く姿が目浮かびます。

伝統ある北陸小児糖尿病サマーキャンプの発展を祈念して、一筆書きました。



北陸小児糖尿病サマーキャンプをふり返って

珠洲市総合病院内科 小泉 順二



北陸での小児糖尿病サマーキャンプが 40 回という節目となったことうれしく思います。

私が金沢大学医学部を卒業して内科に入ったのが 1973 年ですので、今年で 42 年経ちました。内科に入り糖尿病・高脂血症の馬淵先生の研究室に所属してサマーキャンプにかかわるようになったのは、はっきりした記憶はありませんが第 2 回からでしょうか。そのころは 1 内と 2 内で交代に担当していたように思っています。

私の父と兄は小児科の医師ですが、私はどちらかといえば子供が苦手で、子供とどう接してよいか不安でした。そのため、子供との接点が少ない血糖測定などの仕事をできるだけ行っていました。そのころはエームス社のデキスターが発売された頃でしたが、精度などでの不安もあり、検体を金沢大学まで運んで血糖を測定していたこともありました。最初は自分で測定キットを使って測っていましたが、その後、病院の検査室の協力で測定していただいたこともありました。HbA1c の測定や 24 時間蓄尿での尿中 C-ペプチド測定な

ども行ったことがあります。蓄尿では臭いが強く苦情もいただきました。

インスリン注射も種類は少なく、昨今の超速効型を使用した頻回注射、CSII とは隔絶の感があります。生活にインスリンを合わせるといことはできず、患者も医療者も苦勞が絶えませんでした。キャンプではいろいろなことに挑戦しました。意識が急になくなる重症低血糖を見聞きしたのもサマーキャンプが最初でした。遊んでいた子供が急に元気がなくなり意識がなくなるなど、大人の糖尿病ではほとんど経験しないことでした。患児 1 人 1 人に目を離すことは危険でした。海水浴、登山も計画され、患児の数倍のボランティアが参加しました。

サマーキャンプが始まったころは、小児糖尿病についての知識も経験も乏しく、患児、家族を含めていろいろとご迷惑をおかけしたと思っています。少なくとも北陸で糖尿病診療に関わった医師、医療スタッフでこのサマーキャンプにお世話にならなかったひとはいないと思います。途中から内科医局ではなく保健学科看護で事務局をしていただくことになりました。まさにチームで動いているサマーキャンプで、北陸の糖尿病に関わるスタッフの仲間意識も醸成されたのではと思います。

金沢大学を 2014 年に退職後は能登の珠洲に診療の場を移しました。これからも高齢・過疎の地域で暮らす人々をみながら、サマーキャンプに関わった患者、スタッフのすべての皆様が少しでも楽しく生活ができればと祈念しています。 (2015 年 11 月)

糖尿病週間にちなんで：大森安恵先生のインタビュー放送

元金沢大学小児科教授 小泉 晶一



この原稿を依頼されたのが、ちょうど今秋の糖尿病週間の始まる日でした。そして、私が毎夜愛聴しているNHKのラジオ深夜便でも、糖尿病週間にちなんで特別インタビューを放送していました。東京女子医科大学名誉教授、糖尿病センター長、女性で初めて日本糖尿病学会長にも就任された大森安恵先生でした。妊娠と糖尿病の臨床・研究で日本における草分けです。私は先生と御懇意でも何でもなく、ただその御高名を存じ上げるのみですが、インタビューを聴いて、改めて先生の、世のため人のためになる学問への情熱と執念に感銘を受けました。

大森先生は高知県安芸市の山村の生まれ。なぜか物どころついた時にはすでに、この子は医者になる子だと周囲から言われ、自分でもそう思って育ったそうです。高知県では医学部に進学できないと言われ、女学校の昭和23年、都立桜町高校（高女）に2年で編入。ひたすら勉強し、東京女子医専（医科大学）に合格。学生生活もひたすら学問、学問。新聞部に入り、あこがれの東京女子医大創始者

吉岡先生にインタビューし、「苦しいことは宵越ししない。今日の苦しいことは翌日に残さない。人に話をするときが一番判りそうにならない人の顔を見て話さない」と教えられた。昭和34年結婚。夫は文学部系の人で、父には大反対されたが、「貧乏かもしれないけれども、心は貴族だ」の一言で決めた。無給医局員で妊娠した。死産！ほんとに悲しかった！産後復帰した時に偶然2人の糖尿病を患う妊婦に出会った。当時の糖尿病は妊娠禁忌。中絶を余儀なくされていたが、文献を調べると、すでにヨーロッパではインスリンが1921年に発見され、1923年にはノーベル賞。糖尿病でもインスリンを使えば妊娠できる！と確信して、啓蒙、臨床研究を進め、昭和39年（1964）2月女子医大で糖尿病妊娠の正常出産第1例目を発表した。（日本初例ではないそうだ）

振り返ると、おなかの中で“自殺”した自分の子供が、私を糖尿病妊娠の研究に導いてくれたとおっしゃる。皇居のお堀端に彼岸花が咲く頃必ずお参りに行って「ありがとう」という。昭和30～40年代はすべて流産、しかし40～50年代になって、インスリンを使って糖尿病の正常妊娠が可能となった。ここに到る進歩に大森先生の業績はまことに大きい。卒業して58年、糖尿病一筋。今や糖尿病は、結核に代わって国民病となった現代病だが、3500年前から記録がある。鯉

に糖尿病があることを日本人が発見したそうで、したがって糖尿病は、魚が進化した数億年前にさかのぼるとも。

いつもは白衣姿だがインタビューの日はピンクのスーツでラメ入り、胸元に真珠のブローチが素敵とインタビューアがほめていました。80歳を優に超えるが、ヨーロッパの糖尿病と妊娠に関する研究会、スタディグループ

に毎年出席して発表する努力家で、あたまが下がります。

最後に、現在の東京女子医大糖尿病センター長は、金沢大学小児科出身の内潟安子先生で、立派に大森先生のお仕事を受け継いでご活躍です。両氏のお名前に共通の「安」の文字にも何かの縁を感じ、筆をとりました。皆様の益々のご健勝と貴会の一層のご発展を祈っています。

おまけ この人だあれ？ のコーナー その1



北陸小児糖尿病サマーキャンプでの思い出

ながい内科クリニック 永井 幸広



この度は北陸小児糖尿病サマーキャンプ 40 周年を迎えられるとのこと、心よりお祝い申し上げます。とりわけ事務局の先生方には感謝申し上げます。

私が医師になってようやく 30 年近くになる訳ですから、北陸小児糖尿病サマーキャンプの歴史の長さに敬意をはらいたいと思います。金沢大学旧第一内科で糖尿病を専門に選んでから、最初に参加させていただいたのが、医王山スポーツセンターで行われていたキャンプではなかったかと記憶しています。子供たちと一緒にテントをはり、キャンプファイヤーで十分に満喫した夜に多くの子供たちが低血糖を起こして、対処していたものです。その後、内灘での開催となり、夕方、お風呂からみえる山脈に感動を覚えていました。内科医である自分が小児と関わりをもつ機会は

極めて少なく、ご両親たちからいろいろな悩みを打ち明けられたことは自分にとっても多くの貴重な体験であったと思います。平成 16 年 4 月に現在の地に開業してからは、キャンプになかなか参加ができず、資金面でのサポートを少しばかり継続させていただいている現状です。

昨今の糖尿病治療の進歩は目を見張るものがあります。おそらく iPS 細胞を用いて自前のβ細胞を移植する時代が、インスリン発見 100 周年頃には実用化できるのではないかと期待がもたれています。そうなればインスリン自己注射から解放される時代がやってくるものと信じております。

最後になりますが、本キャンプの立ち上げから今日にいたる発展に多大なる尽力をいただきました澤田大成先生が去る 11 月 16 日にお亡くなりになりました。金沢市立病院院長を歴任され、私にとっても日頃懇意にしてくださいっていた偉大な恩人です。11 月 18 日夕方、通夜の前に先生に最後のお別れをしまいりました。先生が天国にいかれましても、北陸小児糖尿病サマーキャンプの今後を末永く見守ってくださると確信しています。本当に多くのことを与えていただき誠にありがとうございました。合掌。

“ The Good Old Days ”

丸山こどもクリニック 丸山 博昭



北陸糖尿病サマーキャンプ 40 周年おめでとうございます。私が参加させてもらったのは 30 年前だったと知り、改めてサマーキャンプの歴史の重さを感じております。

小児科入局 3 年目の夏がサマーキャンプ初参加でした。春に購入したシビックで医王山まで通ったのですが、運転技術が稚拙なためバックで失敗し、J A F にレッカー出動してもらった目に会いました。がけから落ちずに済み、また愛車シビックも無傷で幸いでした。

生来 indoor な私にとって医王山でのサマーキャンプは“あこがれの outdoor” でした。鈴木先生、笠原先生、ボランティアの学生さん、M R さん等とまずテントの設営から始め、火をおこして料理を作ったり、キャンプファイヤーやお化け大会など。夜はスタッフと“反省会” で盛り上がり、5 日間の日程があつという間に終わった覚えがあります。

医王山のキャンプでは、みなさんご存知の通りこどもたちの血糖のコントロール指導や

勉強をしているのですが、確か海水浴で盛り上がった日の夜中にこどもたちの数名が低血糖発作を起こし、真田先生や看護師さんと静注処置をしたことがありました。その晩は寝ずの番と決め込んで、朝まで看護師さんと話して過ごした覚えがあります。満天の星がプラネタリウムのようにはっきり見えて、とてもきれいでした。いまでも充実感に満ちたい思い出のひとつです。

その後、サマーキャンプの会場が内灘に移ったときは、こどもたちと風呂に入ったり、班ごとに短期間で練習して披露した出し物が懐かしいです。内容は忘れましたが、おそろいのコスチュームで歌い踊り、かなりのクオリティだったと思います。

全部で 4, 5 回、サマーキャンプに参加させてもらい、いい思い出をたくさんもらいました。本当にありがとうございました。



北陸小児糖尿病サマーキャンプ思い出の記

小野 ツルコ（岡山市在住）



北陸小児糖尿病サマーキャンプ（以下キャンプと略称）40周年記念行事が行われて早1年が経過した。記念式典に参加して、サマーキャンプ初期の頃の参加児だった人たちが立派に成人されて、式典を仕切っているのを見て感動した。自分の年齢を重ねたことは忘れて、サマーキャンプ開設の頃をしみじみ思い出し、40年間サマーキャンプを支えてきた人々、キャンプ参加児や家族の方々、スタッフ、ボランティア、関係者の方々に感謝の気持ちをこめて拙文を書くことにした。

第1回サマーキャンプが開設されたのは昭和50年（1975年）7月であった。当時私は金沢大学医療技術短期大学看護学科に在籍していて成人看護学を担当していた。ある日、看護学科の掲示板に、キャンプスタッフとして看護師及び看護学生の募集案内が出ていた。成人看護学の内科系看護を担当していた私と天津栄子さん（石川在宅ネット）が、糖尿病児も将来は大人になるのだから、後学のために参加しようということで応募した。

第1回目のキャンプは金沢大学第一内科の早川浩之先生（現早川クリニック院長）がキャンプ長で、参加児は12人であった。3歳から14歳まで、石川県、富山県、福井県の3県の糖尿病児とそのご家族の方が参加されていた。事務局長は城北病院の糖尿病患者会事務長の興村さんで、キャンプスタッフは金沢大学医学部第一、第二、第三内科の糖尿病を専門とする医師、第一内科、第二内科出身の開業医の先生方、石川県保健所の保健師、石川県栄養士会の栄養士、注射器等医療機器販売のエームス社の職員、城北病院の関連職員の方々であった。第6回目キャンプくらいから小児科の医師が加わるようになった。



キャンプの場所は内灘町の社会福祉センターで、1階が食堂、2階が宿泊室、3階に血糖検査やインスリン注射を行う処置室、糖尿病教室など行う会議室があり、1日何十回となく階段を上り下りした。キャンプスタッフのほとんどの人は、キャンプに慣れていない

と思える高年齢の人で、大人たちの中に子供がぱらぱらいるといった感じであった。私たちの仕事は参加児の血糖測定、インスリン自己注射の指導、低血糖・高血糖の早期発見やその対処などであった。学生時代何回かキャンプ経験をしていた私は、キャンプは楽しくなくてはならないと思い、求められている仕事以外に、キャンプリレーション係を担当した。

食事の前に「ご飯の歌」を歌ったり、空き時間は子ども達と一緒に遊んだり、滞在されているお母さんのお話を聞かせていただいたり、キャンプファイヤーやお楽しみ会の計画をしたり、かくし芸の出し物を工夫したり、如何にしたら楽しいキャンプになるかと、キャンプの盛り上げに努力した。4泊5日の期間がアツという間に過ぎたが、キャンプファイヤーやお楽しみ演芸会ではお母さんたちのかくし芸もあり、笑い転げるような場面もあった。ともかく最後の閉村式では開村式のときとは違って、参加児たちの表情が明るくなっていたことを覚えている。

第2回キャンプが始まる前に興村さんからサマーキャンプに参加してほしいと依頼があった。キャンプ期間は夏休み中だしボランティアとして参加することに異存はなく、学生を何人か同行して参加した。そして北陸小児糖尿病サマーキャンプ運営委員会という組織があり、サマーキャンプが糖尿病専門医や城北病院の糖尿病患者会の方々に成り立っていることを知った。特に患者会の事務局をされていた興村さんや第一内科出身の高松弘明先生

(高松内科医師)、澤田大成先生(金沢市立病院副院長) 前述の早川先生、馬淵宏先生(第二内科医師) 小泉先生(第二内科医師) 方が中心に、資金集めから、キャンプ企画、運営に心を砕かれていた。



以後第13回キャンプまでキャンプの仕事をさせていただいたが、3回目か4回目のキャンプを前に事務局長の興村さんが病に倒れた。城北病院には興村さんの後任がいないということで、キャンプ事務局を担当する場所がなくなり、運営委員会としては困っていた。その時馬淵先生が、キャンプは多職種がかかわって成り立つのであり、コメディカルの人が担当するのがよいのではないかと言われて、看護学科で引き受けることになった。そしてキャンプの企画・運営・連絡などすべての仕事の責任者として私が窓口となった。財政的なことに関しては高松先生が中心になられて、資金集めをされていた。石川県や金沢市の補助金、開業されている先生方や、金沢兼六ライオンズクラブのご寄付で運営されていた。特に石川県の補助金、ライオンズクラブの寄付金はとてもありがたかった。

サマーキャンプ 40 周年によせて

キャンプの事務局は私だけが担当したのではなく、看護学科の若手教員を巻き込んで、キャンプが終了すると、次年度のキャンプをどこにするか、テーマ（目標）は何にするかなど断続的に話し合いながら、キャンプを運営していたように思う。教員を医療班、生活班、栄養班、行事班に分担し、それぞれがテーマを考え、キャンプ参加者全員にとって楽しく意味あるものになるようにと頑張った。

キャンプの経験が積み重なるとともに、キャンプ行事が豊富になった。海水浴に行ったこと、白山登山をしたことは忘れられない。特に白山登山は一般の人にとっても体力のいる運動であり、糖尿病児にとって可能なのかと心配した。今思えば過剰な備えであったと思うが、男性ボランティアが酸素ボンベを担いで登った。登山道わきで血糖を何度も測定しながら登頂したこと、暗いうちに起きて白山のご来光を拝んだことは懐かしい思い出である。

昭和 61 年に石川県医師会の推薦により保健文化賞をいただいたことも忘れられない。

保健文化賞は保健衛生を実際に著しく向上させた団体・個人に与えられるもので、北陸小児糖尿病サマーキャンプ運営委員会として受賞した。運営委員会代表の澤田大成先生に同行して東京に行ったことも懐かしい。

いろいろ思い出は尽きないが、限りがないのでこのあたりで終わりにする。昔の記録としてははいるが倉庫に眠っているので、記憶のみで書いた。記憶誤りあるかも知れないし、私の偏見と独断もある。間違っているところはお許しいただきたい。

キャンプが 40 年以上続いていることに感謝して、これからも継続されることを祈念して筆をおく。
(2015.10.31)



“酸素ボンベを担いで白山登山” 懐かしい思い出

NPO 法人いしかわ在宅支援ねっと 天津 栄子



サマーキャンプ初期の思い出

北陸小児糖尿病サマーキャンプは、昭和 50 年（1975）以来、毎年夏休みに河北郡内灘町で 4 泊 5 日で実施されてきた。そして、昭和 57 年のサマーキャンプ・プログラムに、初めて“白山登山”が、運動プログラムの一環として取り入れられた。

4 泊 5 日のキャンプ・スケジュールのうち、1 泊 2 日が登山に当てられた。登山参加児童は 7 名（登山初めて 5 名—小学生～高校生、立山・富士山も登山経験 2 名—中学生）で、スタッフは医師、看護教員、医学生など 10 名で、総勢 17 名の登山チームであった。

一番の心配ごとは、低血糖による意識低下・消失等への対応で、酸素ボンベは何としてでも必要器具であった。ヘリコプターで運ぶこともできず、2702m の白山を酸素ボンベを背に登るのはスタッフにとっても重労働であったが、酸素ボンベは安心の救急機器であった。“ふー、ふー”言いながら酸素ボンベを

担いでいるスタッフの背中を支えたり、“頑張ってる”と、励ましながらの白山登山は“やればできる”という挑戦でもあった。

頂上に着いた時、ある男の子が「こんな美味しい空気、吸ったことない」という言葉に、癒された記憶は今も残る。“苦難は希望への水路”と言われるように、参加した子供たちは白山登山を通して、自分との闘い、挑戦する勇気や行動力、自然の美しさや感動を体験し得た貴重な学びであったと思う。

“継続は力なり”を実感！

昨年（2014）10 月 19 日、サマーキャンプ 40 周年の会に参加させて頂き、脈々と受け継がれ、成長発展している北陸小児糖尿病サマーキャンプの現在に感動、小野ツル子先生と懐かしさを分かち合いました。自分の身体や病気について学び合い、互いにつながって自分の中に眠っている力をどんどん引き出し、頑張っている人達に拍手をしたい思いになりました。北陸小児糖尿病サマーキャンプが、40 年を経過して小さな種が、こんな大きな樹になり、樹の 1 本 1 本がしっかり根付いて・・・北陸のこの森が、これからどんなに大きくなっていくのか・・・と、思うと心から応援したくなります。

次は、半世紀、50 年をめざして、ゆっくり着実に歩み続けられますよう願っています。

白山登山を提案しました

株式会社グッドステーション 黒梅 明



私は、北陸小児糖尿病サマーキャンプを起こされた一人である興村博人さんに勧められ、事務局運営に携わりました。最初はキャンプの実務を泊りがけで何でもやり、学生スタッフや事務局の先生、医師、お母さん方、製薬会社のプロパーの方々と一緒に過ごし、楽しく過ごせました。しかし、重ねて参加するうちに、この子どもたちの将来のために、何か欠けているのではないかと思いだしたのです。医師の皆さんは献身的で、子どもたちの命を守るためにかけがえのない役割を果たしていましたし、お母さん方も一生懸命でした。でも、私が担当していた日本糖尿病協会県支部では、インスリンを打っている若い女性たちが結婚をあきらめ、社会的には生家でひっそりと暮らしていることが気になっていたのです。病気を自覚して必要な医療を受けることは決定的に重要ですが、成人して社会で生きていくには、いつも誰かに守られているのではなく、自分で切り開いていく心身を育てていく援助も必要なのではと思ったのです。当時、子どもたちは学校では体育を休んでいる

場合が多いと聞きました。社会に出れば、普通の体力を養っておかないと、働くことができません。みんなと一緒にスポーツを楽しみ、恋愛も結婚も出産もあっていいのではないかと。大人たちが子どもたちを心配のあまり守りすぎてはいないか、と生意気にも思ったのでした。

当時、サマーキャンプ長をされていた金大医学部小児科の鈴木先生に、私の思いを率直に伝えました。夏休みが終わったら、学校の仲間に少しは自慢できるような体験をキャンプで試してみてもどうか、例えば白山登山をキャンプの日程にくわえてみるかどうかと話したのです。鈴木先生は動じない方で、翌年のキャンプに獅子吼高原登山を試しに取り入れてくれました。その時は酸素ボンベを担ぎ、血糖測定をしながらの登山でしたが、子どもたちが喜んでくれ、無事に終了したこともあって、その翌年、白山登山が実行されたのです。初めての白山登山は、絶対に成功させなければとスタッフの気合いがこもっていました。若い医師、医学生、看護学生が子どもたち以上に集まり、マンツーマン方式で登山休憩時には必ず血糖測定し、予定通り室堂まで登りました。普通の登山客と同室の室堂内でインスリンを打ち、食事の前には血糖測定もしました。翌日は夜明け前に神社の太鼓を合図に起き出し、頂上でご来迎を仰ぎ、万歳しました。この登山で私は案内役を買って出ました。一人の脱落者も事故もなく、無事みんな下山しました。この時の大喜びの小野先生と子どもたちの笑顔が忘れられません。

北陸糖尿病サマーキャンプ 40 周年に感謝したいこと

東京大学大学院医学系研究科老年看護学・創傷看護学
真田 弘美



私がサマーキャンプに最初に参加したのは 1982 年でしたから、あれからもう、33 年経ったんですね。当時、金沢大学では成人や高齢者を対象とする看護を専門としていましたので、最初の年に子供たちがインシュリンを自分で打ち、サマーキャンプ中に低血糖で倒れる状況は衝撃的であり、忘れることのできないシーンでした。それでも、低血糖で倒れたことをまるで忘れたかのように、その後すぐに復活してリクレーションに興じる子供たちの生命力の強さにいつも勇気をもらう自分がいました。私のサマーキャンプでの仕事は運動班の班長でした。毎日子供たちと朝から晩まで、彼らが自宅では低血糖が心配できない運動量にチャレンジできるように、そして心から楽しんでもらえるように、毎年そのプログラムを作るのが喜びであったことを昨日のこのように思い出します。

これを機に、ぜひ北陸糖尿病サマーキャンプの皆様感謝したいことがあります。一つ目は子供と学生とのインタラクションです。2 週間前から準備がはじまり 4 日間のキャンプ、

そして後片付けは私にとっては、看護の卒業生や現役学生、医学部の学生との語らいの場であり、その時間を惜しいと思ったことは一度もありませんでした。今の生活ではとても考えられない、私の教員人生としての至福のときであったことは紛れもない事実です。

二つ目は、チーム医療の実体験です。サマーキャンプ中のさまざまな職種の方々、たとえば小児科医、内科医、栄養士、企業の方々、またライオンズクラブの方々との協働は、私にとっては多職種連携の貴重な経験となり、後に厚労省での仕事となったチーム医療推進活動の基盤となっております。この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

現在、私は東京大学で創傷看護学を主宰しており、東大病院では糖尿病の足病変予防の外来を毎週木曜日に開いています。通ってこられるのはほとんどが高齢者です。今の目標は糖尿病の方々を糖尿病足潰瘍や切断にさせないことです。糖尿病の方々が最後まで歩ける肢をまもるための支援を続けることが今の生きがいとなっております。



北陸小児糖尿病サマーキャンプの思い出

石川県立看護大学 川島 和代



サマーキャン
プ 40 周年おめ
でとうございま
す。40 年以上の
長きにわたって
継続されてきた

こと、OB・OG のみなさまや支えてこられた関係者や事務局のみなさま方に心から敬意をお伝えいたします。

私は昭和 57～63 年の 6 年間と、平成 8～13 年の 6 年間、計 12 年間サマーキャンプにかかわらせていただきました。主に、私が担当したのは食事班でした。初代の事務局長だった小野ツルコ先生がまだ若い教員（助手）に上手く役割を割り振ってそれぞれを班の責任者にして下さいました。20 代半ば私は体力だけは自信あり、朝の 4 時起きで栄養士の下島さんの指導を受けながら、お母さん達と一緒にご飯を炊くところからキャンプの朝が始まりました。子ども達だけではなく、ボランティア学生や医療スタッフ、ご家族分まで準備するので 100 食は優に超えていました。こんなに大量の食事を作ったことがなかったのでうまくできるか本当に心配でした。でも、段々自信がついてきて 2～3 年たった頃は炊事場をしっかりと仕切っていました。食事班はあまり表に出ることはなかったけれど、サマーキャンプ運営の大動脈である「食事」を任せていただけているという責任感はありまし

た。子ども達が残さず食べてくれたときは本当にうれしかったものです。でも、夕方から夜にかけて低血糖が生じる子ども達も少なくなく有りませんでした。ジュースやブドウ糖ばかりでは血糖値が急上昇、そしてまた、朝方の低血糖、ゆっくりと血糖が推移するようになると思い、おにぎりをせっせと握っていたことが思い出されます（もう少し、根拠をもって工夫ができればよかったのですが・・・）。残ると、学生ボランティアの胃袋に消えたことも・・・。



ある年、サマーキャンプに参加している子ども達と学生ボランティアが自由に食事を作れば良いという企画を提案し、メニューを出してもらいました。もちろん、カロリー計算ができることも期待しておりました。冷やし中華や焼肉などバラエティーに富んでいました。その食材を調達するために、金沢市武蔵ケ辻にあった当時のダイエーまで買出しに行きました。ものすごい量です。でも、好きなメニューを作って食べる子ども達のうれしそ

うな顔を想像して、何度もスーパー内を大型カートを押して駆け巡りました。私の小さな軽四は食材で満タンでした。それぞれのメニューで夕食作りが始まり、あちこちでワーワー言う声が響きます。食は生命の源と同時に生きる意欲の源と実感しました。

いつしか、サマーキャンプではプロの方にお食事を任せるようになりました。それも時代の流れかなと思います。最近では外食のメニューにカロリーや栄養バランスも記載されるお店も増えて来ました。サマーキャンプの食事がいつかすべての人々の健康食の代表

にもなってきました。夏が近づくと、サマーキャンプで大量の食材で作った食事とはかりで一生懸命ご飯の重さを測っている子ども達の姿を思い出す私です。



サマーキャンプ事務局を 14 年間担当して

金沢大学医薬保健研究域保健学系看護科学領域

多崎 恵子



私が「サマーキャンプを知った」のは、はるか昔、金沢大学医療技術短期大学部看護学科の学生のと看でした。クラス担任だった小野ツルコ先生が小児糖尿病サマーキャンプのボランティアを募っていたのです。その頃、私はかなり内気な学生だったのでボランティアとは程遠く遠巻きに眺めていました。そうこうしているうちに時が過ぎ、大学院 1 期生として稲垣美智子先生の教室に在籍したとき、私は「サマーキャンプと出会い」ました。その当時、院生はまだスタッフとしての位置づけが今ほどしっかりしていなかったため、ちょっとしたお手伝い気分で参加していたと思います。別世界のようなのんびりした時の流れだったので、慣れるまで「何したらいいんだろ～」と戸惑いがありました。そういった中で、小さなお子さんのお母さんが稲垣先生と話しながら、「キャンプに出会い救われました」と涙を流しているのに出会いました。私ももらい泣きしてしまったことがよみがえってきます。

また今も鮮やかに思い出すのは、今では見られなくなった海辺でのキャンプファイヤーと御陣乗太鼓です。準備は大変だったと思いますが、子供たちにとってはとてもインパクトのある思い出深い体験になったことでしょう。

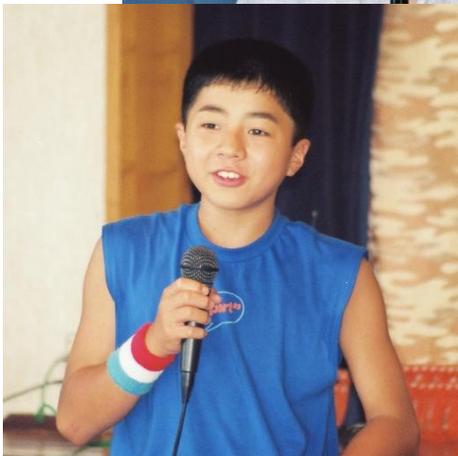
このようなサマーキャンプとの出会いから事務局を担当することとなり 14 年、私はキャンプの「箱作り」担当として取り組んできました。今では屋内プール、手作り料理教室、ダンスコンテストなど、屋内での行事が続いていますが、少し前までは、辰口丘陵公園、福井の恐竜博物館、のどしま水族館、プラネタリウムなど、色々な所へ出掛けたことを懐かしく思い出します。また、内灘町福祉センターが老朽化したために、数年前から内灘町サイクリングターミナルが拠点となりました。福祉センターは 3 階建てで、3 階に大広間があったので子供たちが思い切り走り回ることができました。私も毎日、1 階と 3 階の間を 1 日に何往復も駆け上がったり駆け下りたりしていました。しかし、サイクリングターミナルに移ってからの自分の運動量は、年をとったせいもありますが格段に少なくなっていました（笑）。

笠原先生と稲垣先生の、「参加する子供がひとりでもいる限りキャンプをつづけていく」という精神は北陸のキャンプの礎です。北陸

のサマーキャンプが今後とも子供たちやご両親にとって、稲垣先生の言われる「とまり木」であり続けたいと思います。また学生たちや若いスタッフがこのキャンプを通し、医療者として教育者として育ってくれることを願います。そして、今後とも事務局としてサマーキャンプのお役にたてる自分であり続けたいと思っています。



おまけ この人だあれ？ のコーナー その2



糖尿病サマーキャンプの思い出 —3つの嬉しいこと—

金沢大学医薬保健研究域保健学系看護科学領域
松井 希代子



私の糖尿病サマーキャンプの始まりは行事班見習いからで、なんてにぎやかで活発な子供たちだろうとそのころは一緒に駆け回っていました。主に診療班をさせていただいて長くなりました。診療班になった時は、診療班をできるのかとても緊張しました。

診療班として嬉しいなと思っていることが3つあります。1つ目は、診療班メンバーの協力についてのことです。開催期間中の医療者の確保がなんといっても大切で、大黒柱の笠原先生はもちろんいてくださるのですが、医師の不在の時間をつくらないというみんなの安全のためです。毎年、お願いのお声をかけると「忘れないで声をかけてくれてありがとう」と言ってくださる医師の先生もいらっしゃいます。看護師さんにもこのキャンプの意義を理解して快くご協力いただいております、昼間の看護師さん

と夜間もボランティアで来ていただけて本当に感謝しています。1度キャンプに来た看護師さんは次の年にも子供たちの成長を見たくて来たくなるようで「大きくなったねー」と目を細めて親せきの子供のようにみんなの成長を喜び、楽しみにしてくださいます。稲垣先生の大学院生の方ではなくてはならない存在で、大変な準備から、キャンプ中の診療班をリーダーとして仕切ってくれています。社会人院生だった方は、仕事をしながら学生をしているので在学中は来ることが難しいのですが、大学院修了後に協力いただき、皆でキャンプを盛り上げて助けてくださっています。多くの方に助けていただけて本当に嬉しいなと思っています。

2つ目は、子供たちの安全と体調管理についてのことです。診療班になりたての頃は、日頃の子供たちがわからないので、体調なのか気分なのかがわからず、すねているときも低血糖なのではないかとやたら心配しました。キゴ山や森林公園などに遊びに行った時には、広いので子供たちがどこに行ったか見つけるのが大変でした。今こそ、超速効インスリンがあるので低血糖も長引きませんが、低血糖にならないか心配で右往左往していました。今でもキャンプ

の初日は緊張し、皆がひどい低血糖にならずに怪我もなくキャンプが終わると本当にほっとして嬉しいなと思います。

3つ目は、子供たちのできることを増やすことについてです。たとえば自分でインスリンの針を刺すことができない、足にしかインスリンができないことなどにゆっくり関わって、キャンプならではの他の子どもの様子をみられるようチャンスをつくり、行動が変われるようにすることです。これが私自身はなかなかできていなくて、しかし、医療者の関わりで行動が変わることがあり、よかった嬉しいなと思います。

糖尿病サマーキャンプの子供から「キャンプに来るかと思うと楽しみで楽しみで体が震える」という言葉を聞いた時から、そのくらい無くてはならないものなんだなあ

と思ったこと、ご両親が、夜中に低血糖にならないか心配で、毎日深夜に血糖を測っているがキャンプの時だけ安心して夜眠れると言ってくださったこと、本当にキャンプは大切だと感じます。まだまだ、診療班として何かもっとできるのではと思っています。安全であつたかいキャンプ、楽しみにして来ていただけるキャンプにご協力したいと思って嬉しいなということを増やしたいです。



おまけ この人だあれ？ のコーナー その3



サマーキャンプでの思い出

金沢医科大学看護学部 村角 直子



生活班・食事班の運営スタッフとして、1998年から出産でお休みの1回以外はサマーキャンプに参加しています。思い出となっているのは、十数年前に初めて生活班のスタッフとして参加した時のことです。参加に当たり「生活班とは生活を子供たちと共にご一緒に」と目標を掲げ、子供たちにくっついて過ごしていました。起床すると「布団あげてー!」、就寝時間では「寝るよー!」と叫んでいた気がします。自由時間は当時小学生の女の子たちと炎天下で遊んでいたことが走馬灯のように思い出されます。今となっては歳を取り、体力が続かないようなことも当時していました。当時の小学生は、今20代の社会人のお姉さんやお兄さんになっています。40周年記念のときに会って頼もしい人たちになっていましたし、自分のことを覚えてくれていてうれしくも思いました。思春期特有のこちらからのかわりが難しい時期にあった子供も、大人になると「あの時はこう思っていた」と素直な心のうちを聞くことができ、成長したなーとほろりとうれしくなります。

私自身サマーキャンプの参加を重ねるにつれて、子供たちにとってサマーキャンプという空間と時間は意味があって大切だということをもますます実感しています。日常では、イ

ンスリン注射、低血糖の対処、血糖測定となんらか周りに気を張り、気を使ってしているのでしょうか。キャンプは暗黙の了解でこういったことが承認されている空間で、何か体調の変化があっても医療者やボランティアが何らかの対応し、気遣っています。ちょっとだけ人に任せて、いつもより（ちょっとだけかもしれないが）思いっきり行事に参加できるというのは1年のうちで3、4日ではあります。貴重な気持ちの夏休みではないかと思えます。キャンプに参加している子供たちはあらかた楽しそうですし、安心しているように見えます。

いつだったか診療部長の笠間先生がスタッフの反省会で「キャンプは今回参加したあなたが欠けても成り立たなかった。参加した人ひとりひとりがいてキャンプが成り立っている。」とおっしゃっていました。子供たち、家族の方や参加スタッフは毎年少しずつ違います。毎年ちょっとずつ形のちがうキャンプが開催されています。私はおそらくしばらくはこれからもキャンプに関わります。参加した年のキャンプで自分が最大限にできることを思い、気を働かせながら、間接的であっても子供たちをサポートできるように働いていきたいと思えます。



小児糖尿病サマーキャンプの思い出

金沢大学医薬保健研究域保健学系看護科学領域

堀口 智美



私の最初の思い出は、大学2年生のときです。友人に誘われ、自分にそういうことができるのだろうかととっても不安な中、勇気を出してボランティアに申し込みました。キャンプの3日前くらいからだったでしょうか、初めて顔を合わせるボランティアの方たちと集まりドキドキしっぱなしで準備をしました。名札を作ったり、食事メニューの絵を描いたり、これを見ただけでも楽しい思いになってもらえたらなあという気持ちで、絵が苦手な私も夢中になっていました。しかし、サマーキャンプ前日に自分の母が入院したとの連絡を受け（ただの疲労での入院でした）、実家に帰らなければならず参加が叶いませんでした。そして大学時代は、参加する勇気が出ないまま過ぎ去りました。その後、稲垣先生の卒業研究グループに所属したことがきっか

けとなり、大学院へ進学し、ずっと心に引っかかっていたサマーキャンプに生活行事班として参加する機会をいただきました。とにかく子どもたちに楽しんで欲しい、心地よい場でありたいという思いで必死だったことを思い出します。サマーキャンプが終わって1週間は、子どもたちの表情を思い返し、余韻に浸り、携わらせて戴けた感謝の思いと共に放心状態になっていました。看護師として就職してからは診療班として、夜勤の看護師をさせていただきました。夜中に低血糖になったとき、眠い中捕食をとる子どもの姿は忘れられません。次の血糖測定の時間まで“どうか血糖値、上がって～”と体に力が入りながら祈るような気持ちでいたことを覚えています。

昨年からは事務局のメンバーに加わらせていただきました。サマーキャンプに込められた思いが第1回目から変わることなく、そして40年間続いてきたこと、サマーキャンプのことを知れば知るほど、事務局の一員であることに大きな責務を感じずにはおれません。40年間培われてきたものをしっかりと受け止め、変わることなく繋げていけるようにとの強い思いで今後も携わらせていただきたいと思います。

「北陸小児サマーキャンプに参加して」

日本赤十字豊田看護大学 浅田 優也



私は大学院に入学して以来、北陸小児糖尿病サマーキャンプに携わらせていただいております。本年度のサマーキャンプへの参加で8年目の参加となります。小児糖尿病サマーキャンプは集団生活を通じ、インスリン自己注射や血糖自己測定など自己管理に必要な糖尿病の知識・技術を身につけることや、共に励む仲間を作るための重要な場となることが1つの大きな目的とされています。私は、キャンプ中の子供達の伸び伸びと楽しく過ごす姿や、小さな子が一生懸命血糖測定やインスリン注射を行う姿をみて、北陸小児糖尿病サマーキ

ャンプも子供達にとって重要な場になっていると強く感じています。

また、私は生活行事班として子供達に関わる時間も長く、できる限り子供達に話しかけるようにし、今年も参加してよかった、また来たいと思ってもらえることを常に意識していました。サマーキャンプの参加者の中には、成長しポストキャンパーとなって現在のキャンパーの子供達をサポートする側になっても参加し続けている子もいます。その様な子供達の姿を見る度に、自身の意識していたことを続けていこうと強く思いました。そして、子供達同士がこの様に長期に亘る繋がりを持つてる場となっていることも、サマーキャンプという場はかけがえのない場になっていると強く感じます。

この様な場に携わり続けることができ感謝しています。そして、これからも北陸小児糖尿病サマーキャンプに携わり続けていきたいと思っています。



サマーキャンプの思い出

金沢大学附属病院 藤田 結香里



私がサマーキャンプに参加させていただくようになってから、早いもので6年が経ちました。大学院に入学したことをきっかけにサマーキャンプに関わらせていただくようになったのですが、初めはキャンパーの子どもたちと仲良くなれるかが心配で、キャンプ当日までドキドキしていたことを覚えています。いざキャンプが始まると、子どもたちが笑顔で話しかけてくれたのですぐに打ち解けることができました。キャンプに参加するまでは1型糖尿病を持つ子どもたちと触れ合う機会がなく、子どもたちがどのように生活しているのかも想像できませんでした。キャンプに参加して、小学生でも自分で血糖測定やインスリン注射をしたり、食べる量を考えてインスリン量を決める姿を見て、感心すると同時にたくましいなと感じました。

さて、サマーキャンプの思い出と考えたときに色々なことが思い浮かぶのですが、思い出深いのはダンス大会と「ほんまもん」の企画です。ダンス大会ではキャンパー・学生ボランティアだけでなく、大学院生もMRさん

と一緒にダンスをするのですが、初めてのキャンプで石川さんに成りきるために髪形を真似て、黄色のTシャツを着て「石川サンバ」を踊ったことは今でも記憶に残っています。

「石川さん」の格好は正直恥ずかしかったのですが、子どもたちが笑ってくれたのが本当に救いでした。また翌年の「ほんまもん」という企画では、日本の武道をテーマとして、後輩と一緒に剣道形をさせていただき、さらに空手部をお招きして瓦割りや型を披露していただきました。あまり見る機会のないものを子どもたちに感じてもらうことができ良かったと感じています。

このように2つの思い出を紹介させていただきましたが、やはり子どもたちがキャンプを楽しんでいる姿が一番印象的です。子どもたちの楽しんでいる姿を見ると、私自身「がんばろう」とパワーをもらえます。そして、キャンプ中に子どもたちが成長していく姿を見ることができるのは嬉しくもあり、毎年のキャンプの楽しみでもあります。これからもできる限りサマーキャンプに参加していきたいなと思っています。



糖尿病サマーキャンプ の思い出

福島県立医科大学看護学部看護学科 丸山 育子

1 型糖尿病、この病気をもった子どもたちが夏休みの数日間を一緒に過ごす場を院生のときにほんの 2 年ですが、共有しました。いくつかの場面を覚えています。まだ小学校に行っていないような子どもが注射器を持って、自分のお腹を出して注射していた場面、小学生であろう子が眼底検査を受けて網膜症を疑わせる所見があった場面、いつもおにぎりやクッキーなどがそばにないといけない、高校生くらいの子が高血糖かと思いきやすぐに血糖の低下があってソファーに気だるそうに寝ていたこと。糖尿病を持つ子どもたちの生活のわずかな一部に触れただけですが、何だか圧倒されたような気持ちになったことを覚えています。

私も人の親になりました。改めて、子どもが、自分の体の中の糖の値で、体の不調があり、気分の変化があり、それをうまく管理するには、毎食の食べ物、運動、そして注射が常についてくることの意味を考えるようになりました。

親として願うことは、学校で、社会で、友達同士で、周囲の大人たちが、周囲の子ども

たちが、あたたかいまなざしを向けてくれることです。けれど、現実にはそうではないときもあると思います。また、「こんなときはどうしているの?」「この病気をもって、仕事できるのかな?」など、子どもも親も、子どもの成長とともにいろんなことを考え悩むと思います。親にとっても何とも答えられないようなこともあると思います。親自身にもいろんな気持ちがあると思います。

サマーキャンプは、そんな日常のこまごましたことやいろんな気持ちを安心して共有したり、打ち明けたりする大切な場、時間なのだろうと思います。子にとっても、親にとっても、みなが同じ病気をもっているということは、何より安心できる場、時間のように思います。サマーキャンプは、そのような場・時間を提供するものなのだろうと思います。そのような場・時間を提供することは、多くの力とマネジメントが必要なことであり、毎年、毎年、40 数年にわたり継続されてきたことに、心から感服いたします。

「サマーキャンプの思い出」

京都大学医学部附属病院 中川 さとの

私は他の院生と違って仕事の関係で、実はサマーキャンプは1回しか参加できていません。そのため印象にあるのは、キャンプ前の7月後半から、稲研（稲垣研究室）では院生がキャンプに向けてダンスを中心に様々な催し物のために練習一色だったこととキャンプから戻ってきた院生の顔が真っ黒に日焼けしていたことが思い出されます。

私が参加させていただいたサマーキャンプは台風の中、花火や肝試しが中止になるという異例のキャンプでした。これらの行事は、参加しているすべての人たちがどれだけ楽しみにしているのかということに落胆ぶりから、垣間見ることができました。屋外での大きな行事は中止になりましたが、キャンプに参加している子供たちの生活ぶりには驚くことが多くありました。血糖測定し自分の血糖値を見て、インスリンを何単位打つか、特にカーボカウントしている姿はすごく印象的でした。臨床でカーボカウントを導入する患者をみてきましたが、ここまで計算できる大人の患者はいなかったからです。また幼児～高校生まで幅広い参加者の中で、1型糖尿病という大人でもコントロールが困難な疾患に対し、病気のことは自分が向き合わないといけないというような自立しようとする思いが感じられ、

年齢的には年相応な子供なのに、疾患については精神的に大人なのではと感じました。キャンプを通じて、参加者は自主性を育む機会なのだということを実感し、キャンプの持つ力の大きさを感じました。私たち院生をはじめ大人たちはあくまでサポートする立場ではあるけど、サポートしていたというよりは、反対に教えられていたような気がします。

要するに、私が抱いていたキャンプのイメージは大きく変わったということです。

キャンプを通じて、自分より年上のキャンパーは身近なモデリングとなり、それを体感することで自分にどう反映させていくのかを子供たちは無意識に感じ取って、成長につながっているのではないかということです。教科書的に言われていることが本当のことだと改めてキャンプを通じて体験できたことは、私にとって大きなことだと感じました。

また稲研のOB・OGが時間を見つけてキャンプに参加される姿は、稲研の受け継がれていくよき伝統なのだということを感じました。

何分遠方なためキャンプへの参加は、他のOB・OGの方のようにはいきませんが、機会を見つけて何らかの形でお手伝いできたらと思っています。

小児糖尿病サマーキャンプでの思い出

新潟医療福祉大学健康科学部看護学科 杉本 洋

サマーキャンプに関しましては、記憶が怪しいですが、おそらく学部4年生あたりから3年間くらい（今から14~15年前くらいになりますでしょうか）に渡って参加させていただいていたように思います。大変失礼ながら積極的に参加しようとしてかかわったわけではなく、なりゆきでかかわることになったといった雰囲気だったように思います。しかしながら私自身多くのことを学ぶことができ、参加者の方々、関係者の方々には本当に感謝しております。また少しでもお役に立てたのなら大変うれしく思います。当時私はボランティアスタッフとして「行事班」に属し、様々なイベントの企画、運営のお手伝いをさせていただきました。先生方や、ボランティア学生と共に買い出しに行ったり、企画を練ったり、消防署にキャンプファイヤーの手続きをしいたりしたことが思い出されます。当日、キャンプファイヤーや肝試しなどの行事で子どもたちが喜んでくれたり、怖がってくれたりしたのはうれしいものでした。キャンプでは、参加している子どもさん達も年齢層が幅広く、年齢が高い人たちが小さい子ども達の兄や姉、よき先輩のようにふるまっている姿が印象的でした。

学生ボランティアも、看護学生はもちろん、別の学科や専攻の方もおられて、普段接することの少ない方々と出会うきっかけになりました。最初はボランティアの先輩達に教えて

いただきながら、そして何年目かにはかわいい後輩たちと共に活動する立場になり、苦勞もありながらも楽しい活動であったことが思い出されます。MRさんの方々にもいろいろと教えていただきました。そうしたサマーキャンプを通して出会った方々の中には現在も付き合いが続いている人もいます。

私は卒業後、市町村の保健師をしたり、保健師・看護師教育に携わったり、自助グループのような当事者活動のことを調べたりという活動をしてきました。そうした私がしてきた活動の基底には、サマーキャンプの体験があると感じています。サマーキャンプでは、当事者の方々と共に何かをすることか、病院等のみならず広くサポートを考えるとかといった大切な観点を学ばせていただき、私の財産になっています。また、糖尿病のサマーキャンプのことを調べている人と出会ったときなどにも、「私も参加していたことがありまして」と話が弾むことがあり、今の生活においてもサマーキャンプの体験は大切な位置を占めています。

あの頃サマーキャンプに来ていた子どもたちはもうずいぶん大きくなってそれぞれ様々な分野で活躍されている人も多いのではと勝手に想像して楽しんでいます。また機会がありましたらキャンプにもかかわらせていただきたく思います。本当にありがとうございました。

サマーキャンプ 40 周年によせて

西村 昭信（西村 睦美の父）



娘、睦美が平成 2 年 11 歳の秋、突然 1 型糖尿病を発症した際は、お先真っ暗、途方に暮れておりました。

県立中央病院の久保先生の勧めで初めてサマーキャンプに参加をした折、会場の玄関先で至極自然に笑みをうかべ、やさしく出迎えてくださった稲垣先生と笠原先生のお姿や、献身的にお世話してくださるスタッフの皆様方に安堵した事を思い起こします。

高松先生の名司会によるお話し会や、子供達に退屈を感じさせないカリキュラム等々、

サマーキャンプを重ねる度に多くの知識をおそわりました。

娘も高校、大学生の頃は年下の子供達との話し相手となり、多少なりともお手伝いも出来る程に成長させていただき、大変貴重で有意義な時をありがとうございました。

ご指導いただきました先生方や歴代のスタッフの方々への感謝の一念でございます。

このキャンプは 1 型の DM の子供達の成長の過程に於いては大変重要かつ意義深く不可欠の存在だと確信いたします。

ご苦労が多大でお世話も大変な事とは存じますが、サマーキャンプが増々発展される事を祈念してやみません。

本当にありがとうございました。深く感謝申し上げます。今後共よろしく願い申し上げます。



「サマーキャンプは僕の居場所」

キャンプ OB 金沢市消防局 松本 泰輝



寒さもやっと少しはゆるんできたようで、サマーキャンプのみなさま、いかがお過ごしでしょうか。

平成 27 年 3 月 14 日に開業して、世間をにぎわした北陸新幹線も早くも一周年を迎えました。そんな北陸新幹線よりも歴史が深い北陸小児糖尿病サマーキャンプは 40 周年という大きな節目を迎え、振り返ってみるとなんとも懐かしいものです。まだ年齢 22 という人生経験が薄い僕が過去を振り返るのもおかしな話ですが、少しだけここに書き綴りたいと思います。

僕が初めてキャンプに参加したのは 13 年前の小学校三年生の時でした。きっかけは僕が通っていた中央病院の担当の先生からキャンプの誘いをいただいたのがはじまりでした。現在は内灘町サイクリングターミナルがキャンプの拠点となっていますが、当時は内灘町福祉センターという内灘大橋を医科大学から渡って右手に見えてくる施設が拠点で、今でも施設の前を通ると懐かしく思います。

最初は何をするのかわからないままキャンプに参加したのを覚えています。きっと母に半ば強引に連れられてきたのだとおもいます。年上のお兄さんばかりで僕と同じ年代の参加者はいなく、不安に思いましたが、年上の参加者や、ヘルパーのお兄さん、お姉さん、先生、看護師さんの方々が僕のことを暖かく迎えてくれて、優しく、何より楽しく接してくれたおかげで、初めの不安も一瞬でなくなりました。その時からここが僕の場所になりました。

3 泊 4 日のキャンプでは、楽しい内容が盛り沢山であり、肝試し、工作や花火大会は今でも僕を構成する一部？というよりも、あの時の思い出がないと今の僕という人間はいません。

そんな楽しい時間も流れるのが早く、別れる時には悲しくて嫌になりました。現実引き戻される感じです。また長い一年が始まるのかと憂鬱でした。帰りの車の中では涙が止まらず、子供ながらこの世の終わりだと思うぐらい気持ちが沈みました。

また夏が来て、サマーキャンプの季節になって、キャンプの案内が家に届いた時の喜びときたら、言葉では表せません。その代わりに、その喜びは体に表れます。キャンプに向かう最中の車の中で体が勝手に震えてしまい、胸の鼓動が早くなり、車が駐車場に停まった

途端、走り出しました。一年間の想いをぶつけるようにみんなに会いにいきました。

そんな僕も仕事を始め、色々な経験をしてやっと、感謝というものを覚え、キャンプを



企画していただいている方々の苦勞などがわかりました。何かを企画するということは色々な人に声をかけ、案内を作り、僕らの場所を作り、そんな色々な人の支えがあってキャンプがあり、今の僕があります。本当にありがとうございます。これからは僕も支える側の人間になって、色々な人に楽しい思い出を作ってもらいたいです。

成人して2年たった今でも、キャンプに向かう最中の車の中で体が震えます。今でも、楽しみであり、これからも楽しみで、僕の大切な居場所です。

おまけ この人だあれ？ のコーナー その4



サマーキャンプの思い出

キャンプ OG 原井 伸子



私は7歳の秋に発症し、8歳からサマーキャンプに参加しました。当時は北陸3県(石川、富山、福井)合同のキャンプだったため、石川という名称ではなく『北陸小児糖尿病サマーキャンプ』でした。

参加人数も多かったですし、たくさんのお友達ができ、今でも福井や富山の人とも連絡を取り合い、時々一緒にご飯を食べに行ったり、自分たちにしかわからない悩みや苦労していることを話してストレスを発散しています。今、こういうことができるのは、サマーキャンプがあったから、サマーキャンプのおかげで仲間と心を通わせることができたからだと思っています。

また、キャンプに参加したおかげで、自己注射ができるようになりました。当時は、茄子を半分に切った物を腕や足にテープでとめて注射の練習をしました。その頃は、今の様にペン型のインスリンはなく、速効型のインスリンと持続型のインスリンを長くて太い針の注射器に自分でつめて混合してから打って

いました。また、キャンプ終了式の時には、参加した患児にそれぞれの賞状があたり、私は『注射打てたで賞』がもらえて、子供心に嬉しかったことを覚えています。

(※記念誌を作成するにあたって、各メーカーの方にインスリンや針、血糖測定器の歴史を調べていただきました。記念誌の中にある資料から、どのように進化していったかがわかるようになっています。)

キャンプでの思い出は、たくさんありますが、特に白山登山。白山登山が始まった時、私はまだ低学年だったため、参加したいと言っても「もうちょっと大きくなったら、高学年になったらね」と言われ、すごく残念で悔しかったことも覚えています。4年生になって、白山登山の許可がおりて行けるようになったのですが、バス酔いしたり、食事を食べたくないと言って先生方を困らせていたということを大人になってから知りましたが、当時は、歌を歌いながら、小野先生にサポートしていただきながら、登山することができ嬉しかった、楽しかったという思い出ばかりです。

私は就職してからは、サマーキャンプには仕事の都合上、全日参加はできず、いつも1～2日の参加ですが、キャンプでのお手伝いができない分、30周年や40周年の記念式典や今回の記念誌作成にあたってのお手伝いをさせていただきました。

この記念誌作成では これまでサマーキャンプに関わってこられた多くの先生方に原稿のお願いの電話やメールをさせていただきました。どの先生も私のことを覚えてくださり、優しいお言葉までいただきとても嬉しかったです。お忙しいにもかかわらず親切に対応していただき、ありがとうございました。今後は、若い人にバトンタッチしていきたいと思っています。

これからもサマーキャンプが末永く続いていくことを願っています。



おまけ この人だあれ？ のコーナー その5



なんだかんだいっても糖尿病だし

合同会社 M-project

訪看リハビリステーションいまひら 代表

キャンプ OB 光田 雅人



サマーキャンプが始まって 40 年をこえ、それと同時に僕が個人的に糖尿病とお付き合いするようになってからも 40 年になろうとしている。むかし、生意気な子どもだった僕は、いまではすっかり生意気なおっさんになってしまった。

糖尿病にもいろいろあって、1 型とか 2 型とかいった分類だけでなく、同じ 1 型の中にもいろんなタイプの人がいるように思う。同じ時期にサマーキャンプ現役生だった人たちの中でも、急激に低血糖を起こして意識消失する人やら合併症やほかの身体症状に悩まされる人などやらおられるのだが、幸い僕がお付き合いしている糖尿病は主に似たのか（おいっ！）とてもおとなしいヤツで、特に「糖尿病だから」と構えて戦わなくても、これまで曲がりなりにもなんとかやってきた。まあ、考えてみれば高校時代からどちらかというといつも一人でいて親しい友人というのは少ないし、最初にいった大学は途中で辞めて帰っ

てくるし、入った会社では低血糖で意識朦朧としたまま車を運転して新聞沙汰になるし、結局途中でやめてリハビリテーションの世界に足を踏み入れたりしているし、アラフィフになってまだ独身だったりするのだけれど（いろいろあるぞ…特に最後の問題は非常にやっかいだ）、それは僕が「糖尿病だから」というよりも「生意気なヤツだから」だと思っている。そんなわけで僕は「闘病」「療養」という言葉が嫌いで殊更「お付き合い」という言い方をしたりする。



でも。ともう一度考えてみる。今の僕は、やっぱり糖尿病とセットなんじゃないか？

曲がりなりにも医療職の端くれになったのは自分が小さいころから病院といつも仲良しだったからだし、仕事としてリハビリテーションの世界に足を踏み入れたのは、会社を辞めた時、作業療法というものがあること、そして金沢大学医療技術短大（当時）に社会人

選抜があることを知って稲垣先生に相談した時の「光田くん向いてると思う♡（語尾には間違いなくハートマークがついていた）」という言葉が大きなきっかけになっていたりする。さらに僕が仕事の上でいつもいう「心が動けば身体も動く」とか「おせっかいをしよう」なんていうのは、思いっきりサマーキャンプを支えて下さっている人たちの姿そのものなんじゃないか。そんな風に考えると、やはり僕は糖尿病とセットなんだなあ。。。というか、「サマーキャンプとセット」なのかもしれないと思えてくる。「糖尿病であること」に感謝することは到底できないけれど、サマーキャンプに出逢ったこと、そして今もずっとかかわり続けられていることには大いに感謝しなければならない。「なんだかんだいっても糖尿病」なのだ。

「なんだかんだいっても糖尿病で生意気」な僕は、今度は会社を作って地域のみなさま

に「おせっかい」することにした。この冊子がみなさまのお手許に届くころには、サマーキャンプ 42 回目の歴史とともに「サマーキャンプとセットの僕」にも新しい歴史が刻まれることになる。僕の歴史に「頑張ってる何かやっています」が加わるのか「あいつ夜逃げしたらしい...生意気なヤツだったしね」が加わるのか？ 願わくば、50 周年の記念の際には「キャンプの 40 周年のころが僕の大きなターニングポイントだったんですよ」とまた生意気に言ってみたいと思っている。



追伸

最近のキャンプではカメラを持って徘徊(?)していることもあり、今回サマーキャンプ 40 周年記念誌の編集にあたって、写真を中心とした過去の資料の調査・整理と保管をお引き受けしました。40 年の歴史の記録はかなりのボリュームで、重みを改めて実感することとなりました。その一部はこの冊子の端々に散りばめられているのでお楽しみいただければ幸いです。「もっと見たい」というご希望があれば、運営委員会事務局を通じてお申し出いただくか、下記連絡先にご一報いただければ対処できるかと思えます。運営委員会、記念誌編集委員会の許可をえて、連絡先を掲載いたします。

北陸小児糖尿病サマーキャンプ 資料についての連絡先

〒924-0827 石川県白山市今平町 429 番地

合同会社 M-project 代表 光田雅人

TEL 076-275-8020 FAX 076-275-8060

Mail masato_m@m-project.biz

積み重ねて貰ったもの

キャンプOB 山崎 照尚



気が付いたらサマーキャンプに行くようになって 40 年たっていました。7 才で発病して色々和我慢する毎日が始まりました。食べたい時に好きなだけ色んなもんが食べれない、朝は、どうしても注射をうたなければいけない、小学校の授業中に身体のだるさからチョコレートや角砂糖を食べるなど、自分だけが凄くアンラッキーな存在に思えてました。自分は病気になって良かったとは、今でも一回たりとも思った事はありません。ただ、それでも、このサマーキャンプだけは自分を救ってくれたのかなあ～と思います。1 年間、周りに比べて損をしていると思える生活を送っている

中で 1 年に一回だけ夏に 1 週間だけ周りよりも得をしていると、間違いなく思える時間がサマーキャンプだったと思います。毎日、野球もしました。毎日、海に泳ぎに行きました。白山に何回も登りました。調子にのっていた頃、森林公園から内灘まで歩いて帰ろうとした事もありました。楽しい思い出も、まだまだ一杯あって色々、迷惑も一杯一杯かけた中で何よりも思い出は色んな人に出会えた事です。色んな方に優しさを貰えた事です。笑顔で会える仲間に出会えた事です。自分の生涯で出会わなければいけない人に出会えた事は本当に幸せでラッキーでした。地元の仲間、こんな話を誰ひとり言えないけど、サマーキャンプに関わってきた色んな方々には笑って言える自分の宝物です。サマーキャンプは、何時までも、こんな感じでいて下さい。本当にありがとうございます。



この稿をまとめるにあたり「サマーキャンプの歴史が感じられるようにできないかなあ。。。｣と考へて、現在残されている写真資料から、寄稿していただいたみなさんをはじめとした関係者のみなさんの「一番古い写真」と「一番新しい写真」(いずれも推定)を発掘して掲載させていただくことにしました。掲載に際してご本人の了解を取らない「サプライズ」になっておりますが、これも「サマーキャンプ 40 年の歴史の証」としてご了解いただきたく存じます。

サマーキャンプ 40 年のあゆみ

★北陸の地にサマーキャンプが産声を上げる★

1975 年（昭和 50 年）日本糖尿病協会石川県支部理事長興村博人氏、高松弘明高松医院院長、金沢市立病院副院長（当時）の沢田大成氏が中心となって北陸小児糖尿病サマーキャンプ運営委員会が発足した。北陸で初めてのサマーキャンプは、「キャンプを楽しく」を目標に、内灘町福祉センターを会場にして 8 月 6 日から 8 月 10 日までの 4 泊 5 日の日程で開催された。

第 1 回の参加者は 12 名（男子 4 名、女子 8 名）。キャンプ長は金沢大学医学部附属病院医師（当時）の早川浩之氏。また、キャンプの運営には上記の諸氏をはじめとして、金沢大学医療技術短大看護学科（当時）の小野ツル子氏など医師、栄養士、看護婦、医療学校学生などからのボランティア総勢 52 名があたった。全国で 9 か所目の小児糖尿病サマーキャンプの開催であった。

★草創期の試行錯誤★

世間一般の常識として、また医学界においても『小児糖尿病』なるものの認識の低かった当時のこと、また、限られたスタッフによる運営でもあり、当時のキャンプは試行錯誤の連続であったようだ。「療養キャンプ」としての性格と、キャンプ目標にもある通りいかに「楽しい」キャンプにするかという 2 つの命題に対し、スケジュールにも苦労の跡が偲ばれる。当時のスケジュール表には「ソ連

船見学（賛同者の中に日ソ貿易協同組合があった関係か？）」など、現在のキャンプにはないような行事が盛り込まれていたりする。

第 1 回から第 10 回まで、町当局の理解もあってキャンプは内灘町で行われた。第 1 回から第 6 回までは内灘町福祉センターを宿舎として開催されたが、当時ここには調理の施設がなく、普段の食事の準備や糖尿病教育の一環である調理実習など、こと食べ物に関しては苦労が多かったようである。ちなみに当時食事の準備は参加者の家族が持ち回りで行っており、宿舎とは別の場所で調理したものを『出前』する形をとっていた。「誰かひとりが代表として保健所に検便を提出しなければ



サマーキャンプ 40 年のあゆみ

ならなくて。。恥ずかしかった。。」などという思い出が聞かれるのも草創期の話である。

また、草創期のサマーキャンプは「ボランティア」という言葉を越えるような手作り感満載で「地区の学校からテントを借りてきて海水浴場に建てる」などということはお茶の子さいさいだったのである。さらに行事などで宿舎近



辺を離れる際の移動手段もボランティアの乗用車に分乗するという形をとっており、当時のキャンプ事務局の備忘録には、「8月〇日 10時、2台（エームス） 定時 10分前には配車完了のこと」などという記述があったりして、当時のキャンプ運営の舞台裏が覗けたりして興味深い。



★本格的な夏山登山 ～万全の体制で白山へ～ ★

初回から回を重ねてある程度キャンプの骨格が固まってくると、一種冒険的な行事が企画されるようになる。中には全国のキャンプでも初めてという本格的な夏山登山（白山）も行われた。

第7回（1981年）での獅子吼高原への登山の経験をもとに、第8回（1982年）、全国のサマーキャンプでもこれまで例のなかった本格的な夏山登山である白山登山がキャンプで初めて企画された。参加したのは既にキャンプ経験2回目以上の中学生7名（男子5名、女子2名）であった。バックアップするスタッフはサマーキャンプの運営にあっていた金沢大学医学部附属病院医師、金沢大学医療短大職員および学生のほかに、白山診療

班（金沢大学医学部有志で構成）の協力もあり、万全の体制であった。これは当時糖尿病患者に対する運動療法について、本格的な登山の是非について過去に経験がなかったため、万一の事態に備える措置であった。幸い（というか当然）大きな事故もなく全員無事下山。



運動療法としての登山の有効性ばかりでなく、子供たちの精神に与える好影響についても意義のある経験となった。この登山の際の参加者の運動療法上の諸データ（このころから自己血糖測定が比較的簡単にできるようになった。そのときの血糖値は『HI』連発だったとおもうが。。。）は、金沢大学医療技術短期大学部看護学科の天津栄子氏、小野ツル子

氏、金川克子氏、稲垣美智子氏、西村真実子氏、嶋弘美氏、荻野妙子氏の諸氏（いずれも当時）によってまとめられ、その精神的好影響についても発表された。

サマーキャンプにおける白山登山は第19回（1993年）まで続けられたが、その後もリーダーの黒梅明氏の好意により有志を集めて継続された。

★知らせたい。。。でも知られたくない。。。★

このようにサマーキャンプがその基礎を固めつつあるとき、『小児糖尿病』自体もその存在が一般に知らされるようになり、サマーキャンプやその中における参加者、スタッフの取り組みなどが報道される機会も増えてきた。地元放送局や新聞紙上の特集などにサマーキャンプの様子が取り上げられるようになるにつれ、参加者のプライバシーに関する問題が生ずるようになった。当時（これは現在にも通じることであろうか？）『糖尿病の子供』は『珍しい』ものであり、それを一般に知られることは患者関係者（本人というよりも保護者にその傾向は強いように見受けられた）にかなり抵抗があったのである。もとよりサマーキャンプの運営に当たっては、参加者の住所や受診している医療機関の名称など個人情報やサマーキャンプの運営に協力していただいている医療関係の業者にも明らかにされていない。医療に従事する者としての守秘義務に対する意識も強く影響していたようである。放送画面や記事の写真などに『顔が映る』ことについては、かなりの議論が交わされたようである。結局、『顔ので

ない』報道に限られることとなった。「撮影したビデオ映像に映っている『子供』ひとりひとり全員について『糖尿病かどうか?』」をチェックした。特にNHKのチェックは細かかった」と事務局の稲垣美智子氏は懐述する。

『その存在を認識している』ということと『その存在について差別や偏見を持たない』ということとは別であるということを実に示す例であった。このようなこともあって、サマーキャンプとしても、いかに『小児糖尿病』を正しく認識してもらうかが課題として残されることとなった。



★保健文化賞の受賞★

サマーキャンプが北陸 3 県の小児糖尿病キ
ャンプとしてその役割を確実にしつつあった
昭和 61 年（1986 年）9 月、北陸小児糖尿病
サマーキャンプ運営委員会は第一生命株式会
社より「保健文化賞」を受賞した。

この賞は、第一生命株式会社が厚生労働省
などの後援を得て昭和 25 年（1950 年）に創
設したもので、「わが国の保健衛生の向上に
取り組む人々に感謝と敬意を捧げる賞」とさ
れている。創設当初の受賞者には「当時の医
学の発展に大きく寄与するような発見をした」

ような「偉人」の名前が並ぶ。石川県では昭
和 42 年（1967 年）に松任保健所が受賞して
以来 19 年ぶり 7 件目の受賞（平成 26 年まで
に県内で 11 件の個人・団体が受賞している）
で、県内では自治体を除く団体で初めての受
賞であった。

受賞に際しては天皇陛下への拝謁もあり、
記念として賞状と盾、賞金 200 万円が贈られ
た。賞金は「基金」として積み立てられ、現
在も手つかずのまま万一の時に備える資金と
して準備されている。



★昔のこどもは今よりやんちゃ？ ～『内灘時代』のエピソード～ ★

登山のような行事としての冒険的試みばかりでなく、この『内灘時代』のキャンプには、参加者や運営スタッフの印象に残るエピソードが数多く残されている。海水浴の時に浜で探ったハマグリを夜にこっそりと焼いて食べようとした（焼き網として部屋のロッカーの金網まで持ち出すという周到さ、熱源には使い捨てライターが使用された）り、金沢市森本町にある石川県森林公園から内灘町の宿舍までおよそ 15 km の道のり（徒歩による所要時間は大手検索サイトによると 2 時間 43 分）を緊急連絡用の 10 円玉だけ持ってヒッチハイクで帰ったり（当時のキャンプ長だった鈴木祐吉氏は、一度は許したものの心配になってあとをこっそり尾行したという）と、当時

のサマーキャンプは普段『糖尿病の子供』である参加者が本当は『普通の子供』であることを体験し、証明する貴重な機会であったようである。

ボランティアで参加してくれる学生さんたちにも一つの流れが出来つつあった。第 4 回、当時金沢大学オーケストラ部に所属していた医学部学生（当時）犀川太氏のボランティア参加に続いて、毎年オーケストラ部の医学生がサマーキャンプに参加してくれるようになり、キャンプでの「クラシックコンサート」はキャンプの中での大きな目玉となった。

その流れは 40 回を超えた現在にも受け継がれている。最近のサマーキャンプでは、大学サークルの有志によるコンサートや大道芸、武道の演武など普段見ることの少ない「本物」に触れる機会となっている。



★今年はどこでやるの？ ～キャンプジブシー時代～ ★

『内灘時代』にその基礎を確立し初期の混乱状態を脱した北陸サマーキャンプは、第 11 回から一つの転機を迎える。開催場所の問題である。第 11 回～第 14 回金沢市医王山スポーツセンター、第 15 回石川県青年会館（金沢市）、第 16 回 松任市（当時）青少年宿泊研修センター、第 17 回金沢市ふれあいの里 と開催場所を転々とする。一部スタッフの言う『ジブシー時代』である。

開催場所は問題を抱えながらも、サマーキャンプは新しい試みを続ける。金沢市医王山

スポーツセンターのキャンプでは、テントでの生活を企画、名実共に『キャンプ』となった。

運営の面では、第 10 回のキャンプよりキャンプ長が金沢大学医学部の学生さんに委ねられた。また、長年サマーキャンプ運営スタッフの中核的存在だった金沢大学医療技術短期学部看護学科（当時）の小野ツル子氏が岡山へ異動となり、あとを同学科の稲垣美智子氏、真田弘美氏、西村真美子氏（当時）を中心とするグループが受け継ぐこととなった。

★キャンプとともに変わる糖尿病との付き合い方★



新しい情報の紹介や、また実際にサマーキャンプを機会に新しい方法に切り換える参加者がいるなど、サマーキャンプが参加者にとってひとつの転機になることがある。サマーキャンプ創立当時は、成人も含め糖尿病患者が自宅でできる検査といえば尿糖検査のみであった。当時のサマーキャンプの参加案内には『自己尿糖検査の習熟』が明記されている。またインスリンも、ウシもしくはブタのすい臓より抽出されたものが使用されていた。

40 年の歴史の中で、検査関係では自己血糖測定や、病院で行われるヘモクロビン A1、ヘモクロビン A1c、フルクトサミンなどの療養上の有効性についての紹介が行われ、サマーキャンプでもこれらの検査が取り入れられた。インスリンはバイオテクノロジーの発達により、遺伝子組み替えによって合成されたヒトインスリンが使われるようになった。注射についてもペンタイプのインスリン注入器の登場や、小型ポンプによる持続注入法（CSII）



により、従来の朝・夕の 1 日 2 回の注射から、毎食前と就寝前の 1 日 4 回の注射を行う例が多くなってきた。現在ではサマーキャンプ参加者のほとんどが CSII を利用している。

サマーキャンプでも、これらその時々の治療（療養）方法や、実験段階の新技术に至るまで、最新の情報をいち早く紹介、採用してきている。特に昭和 50 年代後半から 60 年代、平成に入るところには、すい臓そのものの移植や骨髄移植によるインスリン分泌機能の回復技術、ブタやウシのランゲルハンス島 β 細胞（インスリンを分泌する細胞）をカプセル化

して注入することで注射回数を減らす技術などが紹介され、参加者本人より保護者の方々の注目を集めた。



★辰口研修センターを経て内灘へ★

医王山スポーツセンターでは「施設の壁を損壊！！」して翌年から受け入れを断られる（明確にこの事件が原因かは定かではないが「丁重に」断られたという）など、事務局稲垣美智子氏の頭を悩ませた開催地の問題であったが、第 18 回（1992 年）より金沢大学の施設である辰口共同研修センターを利用することとなり、いったん胸をなでおろす状況となった。

しかし、エピソードに事欠かないのがサマーキャンプである。辰口に開催地を移した第 18 回のキャンプでは、台風の来襲により予定していた日程を 1 日短縮するという事態に見舞われた。最終日打ち切りを伝えたときの子供たちの怒りと落胆のないまぜになったため息は、スタッフの胸に大きく響くものであった。

1996 年、第 22 回のキャンプはさらに悪い状況となった。病原性大腸菌の流行により、辰口研修センターでは調理を請け負えないという事態に陥ったのである。サマーキャンプには参加者だけでなく兄弟や保護者、医師、看護師やボランティアスタッフなど常時 70 名以上の人々がかかわっている。研修センターの給食設備は、このたくさんの人たちの食事を、安全確実に配食するだけの体制となっていなかったのである。かくして、サマーキャンプは開設以来初めて、中止されるという事態を受け入れざるを得なかったのである。

しかし、ころんでもただでは起きない。第 22 回のキャンプは「オータムキャンプ」として、11 月 23 日から 24 日の短期決戦で開催されたのであった。

食事の安全管理はその後も開催地選定にあたってのポイントとなり、第 24 回（1998 年）

サマーキャンプ 40 年のあゆみ

からはキャンプ誕生の地である内灘に戻ることにとなった。キャンプ開設当時は給食施設のなかった内灘町福祉センターは町民の利用する温泉施設として整備されており、レストランとしても営業されていたのである。サマーキャンプ期間中入浴施設以外はすべて貸し切

りという異例の状況を受け入れていただき、安心して開催することが可能となった。

なお、キャンプ誕生の地である内灘町福祉センターは 2009 年（第 35 回）をもって宿泊施設が閉鎖されることとなり、現在は近接する内灘町サイクリングセンターを開催場所としている。

★開催地は分かれても、やっぱり「北陸」★

～広がるサマーキャンプの輪～

1988 年（昭和 63）福井医科大学（当時）附属病院小児科と同大学の看護学科を中心に福井県でのサマーキャンプが開催されることとなった。また富山県では 1990 年（平成 2）黒部市民病院内科を世話人として主に高校生を中心に 1泊 2日の日程で「ヤングの集い」が開かれるようになった。2014 年（平成 26 年）現在、「福井小児糖尿病サマーキャンプ」は患者会主催で 25 回、「富山 DM サマーキャンプ」は途中対象を小児に広げて 22 回開催されている。

しかし、北陸小児糖尿病サマーキャンプは「石川」と名前を変えることなく「北陸」のまま続いている。福井、富山の両キャンプが対象者を各県に限っているのに対して、あくまでも「北陸」の子どもたちを対象としてきたからである（現在では石川および富山県の子どもたちを対象としている）。実際、福井、富山の開設当時は「北陸」のキャンプへの参加希望者も多く、なかには「1年に2回」のキャンプに参加する強者もいた。

富山県ではサマーキャンプがヤングの会から始まったほど、ヤングの会の活動が活発である。

また、福井県にはキャンプを主宰するほどの患者家族の会が存在している。しかし、石川県には日本糖尿病協会の石川県支部と病院単位の糖尿病患者会（成人対象で会員は高齢者が多い）を除くと、患者会というような集まりの活動は必ずしも盛んといえる状況でない。

昭和 63 年の夏、石川県青年会館（金沢市）を会場に日本糖尿病協会主催の「第 5 回ヤング DM トップセミナー」が開かれ、全国から小児糖尿病の青年が集う機会があった。これを機に石川県でも「ヤングの会」が作られたことがある。当初は活動も盛んであったが、現在では事実上休眠状態となっているようだ（編集委員会の調査の範囲では最近の活動実績を確認することができなかった）。地域の特性なのか、また、携帯電話や SNS など情報・通信手段の目覚ましい発達によりわざわざ集まる必要がなくなったということなのかもしれない。

ともあれ、石川県では子供から大人から保護者の方々も含めて「サマーキャンプ」が小児発症の糖尿病にかかわる人たちのつながりの場となっている。

★形の見える支援へ★

～ライオンズクラブのおじさんは普通のおじさんだった！！～

サマーキャンプを開催するためには、毎年200万円を超えるような費用が必要である。ボランティアスタッフを含めた宿泊や食事、行事のためのバス手配など、その用途はさまざまである。しかし、参加者からの費用徴収は開設以来さほど大きな変化はない（2015年時点で北陸8,000円に対して同じ規模の北海道が16,000円 東京は30,000円 患者会会員が参加条件であるところも多い。他の地域と比較しても格安といえよう）。これは、保護者や兄弟姉妹も含めた参加を考えたとき、参加費用をあまり高額にすることはできないという配慮による。では、不足する費用はどのように調達するのか？

サマーキャンプは実に多くの方々からの寄付によって成り立っている。自治体や糖尿病協会からの補助が大きな割合を占めるが、忘れてならないのが金沢兼六ライオンズクラブからの支援である。

ライオンズクラブは1917年アメリカで誕生した社会奉仕団体で、Liberty, Intelligence, Our Nation's Safety（自由を守り、知性を重んじ、われわれの国の安全を図る）をモットーに「われわれは知性を高め、友愛と相互理解の精神を養い、平和と自由を守り、社会奉仕に精進する」という誓いのもとに社会奉仕をされている団体である。金沢兼六ライオンズクラブは、北陸のサマーキャンプに対して開設間もなくのころから毎年多額の寄付をしていただ

いていて、キャンプの継続に欠くことのできない存在である。

金沢兼六ライオンズクラブの方々には、会員資格が「善良な徳性の持ち主で、地域社会で声望を得ている成人」である通り、地域で名のある会社の経営者であったりする。キャンプにはスーツ姿で開村式の時に来られて、ご挨拶されると帰っていく。援助をいただくのは非常にありがたいが、正直「ちょっとコワそうなおじさんの集まり」であった。



そんな「コワそうなおじさん」が実は普通のおじさんであることに気づかされたのは、キャンプが内灘に帰ってきたころのことであった。それまで金銭的な援助中心だった金沢兼六ライオンズクラブの方々が、キャンプの行事に直接かかわってくださるようになったのである。家を1軒燃やすような(!)けた外れに大きなキャンプファイヤーを作ってく

れたのはご愛敬。子供たちの様子を眺める様子は、そこら辺にいる普通のおじさん、おじいさんそのものの姿であった。

金沢兼六ライオンズクラブには「サマーキャンプ担当役員」の方がおられるそうで、その方を世話役として毎年の援助を続けていただいている。

★歴史を伝える記録たち★

～サマーキャンプの「しおり」と「写真」～

昔、サマーキャンプが4泊5日の日程で行われていたころ、その最終日には「作文」という行事(?)の時間がとられていた。参加した子供たちがキャンプの感想やらを文章にまとめる時間である。これらの作文は保護者やボランティアスタッフのものもあわせて「キャンプだより」として後日参加者に配布され、「サマーキャンプの思い出」として残される記録となった(思春期には大変生意気なことを書いていて、あとで見るととても恥ずかしい)。手書きのガリ版刷りで作られた冊子は、その後ワープロになり、編集者の

多忙から2年分が合併して作られたりしながら、第18回(1992年)まで発行が続いた。

最近ではキャンプだよりの発行はなくなったが、その分「サマーキャンプのしおり」が充実している。グループの名前がアニメなどのキャラクターにちなんでつけられ、それらを生かした構成で作られている。スタッフの主軸をなす金沢大学大学院生のみなさんの力作である。



もう一つ、キャンプの歴史を伝える記録としては「写真」があるだろう。サマーキャンプには隠れた名カメラマンがおられた。お名前を吉川伸一氏(故人)という。氏は糖尿病

協会の理事をされていた関係から開設当初よりサマーキャンプにかかわるようになり、趣味を生かして毎年キャンプの写真撮影を担当されていた。毎年キャンプを楽しみにされていたという。ところが、当時カメラを向けられる立場であったはずである私は、氏のお顔をよく覚えていない。まさに「隠れた」名カ



メラマンだったのである。

1995年（第21回）ころから写真は主に光田雅人が担当するようになった。当初フィルムだった写真は2007年（第33回）からデジタルになり、DVDに保存することで関係者のみなさまへの配布も容易にできるようになっている。



★時は流れ、時代は変わる★

～姿を変えながら でもキャンプはいつもここに～

40年前、「糖尿病療養指導のための場」としてサマーキャンプが生まれたころ、子どもたちはいつも外で遊んだ。サマーキャンプに参加する子供たちは「病気だから」ほかの子どもと同じように遊ぶことを制限されることがあった。思いに反して体育の授業を休んだり、修学旅行をあきらめたりする子もいた。サマーキャンプはそんな子供たちが「普通に」過ごすことのできる貴重な場であった。海水浴もサイクリングも野外炊飯も白山登山も、普段できない「特別なこと」であった。普段の生活ではとにかく「生きていくこと」に精いっぱいだったということもある。

40年の時の流れは、「糖尿病の子ども」の生活を大きく変えた。野球やエアロビクスで名を知られる人も現れた。トライアスロンをやっているという子供の身体は、アスリートそのものである。相変わらずマイノリティーであることには変わりはないが、「糖尿病だから」できないことはほとんどないといっ

よい。
40年の時の流れは、サマーキャンプのあり方も少しずつ変えることになる。そもそも「糖尿病療養キャンプ」であるサマーキャンプだが、何度も参加している「ベテラン組」は糖尿病との付き合い方について、その基礎

サマーキャンプ 40年のあゆみ

より応用を求めるようになった。また、サマーキャンプを「年に1度の同窓会」ととらえる向きもある。

参加者の年齢制限は高校3年生（18歳）である。が、高校生にもなると参加回数が10回をこえる子供（?）も多い。そこで、最近のサマーキャンプでは高校生に「ヘルパー」という役割を担ってもらっている。「参加者」である中学生以下の子供たちを大学生や大学院生の「ボランティアスタッフ」とともに世話焼きする。子供たちには「歳の近い先輩」であるので、その影響は大きいようである。

また、回を重ねて「キャンプ卒業生」の数もどんどん増えている。進学や就職のあと社会の第一線で活躍し、結婚や出産、子育てと、人として一度は通る様々な出来事を経験し、それらを上手く切り抜けてきた「歴戦の強者」



も増えた。彼らもまた「同窓会」であるサマーキャンプをのぞきにやってくる。

これらサマーキャンプOB・OGは、単に先輩として子供たちに接するだけでなく、保護者の方々との関係も作りつつある。毎年ふらりと現れるOB・OGの姿を見て安心するのは、わが子のまだ見えない未来をそこに感じるからなのだろうか。

少しずつ姿を変えながらも、子供たちの笑顔と「来年もまたね！」の言葉をよりどころに、サマーキャンプはいつもここにあり続けるのだろう。



創立記念式典から

サマーキャンプ 40 周年記念式典が 2014 年（平成 26）10 月に開催されたことはご記憶に新しいことと思います。この日はサマーキャンプ初期にキャンプ長を務めてくださった東京女子医大糖尿病センター三浦順之助氏とプロの囲碁棋士である木部夏生氏をお迎えしてのご講演の後、みなさんとともにサマーキャンプの思い出話に花を咲かせました。

実は、20 周年と 30 周年にも記念式典を開催していて、20 周年記念式典は 1995（平成 7）年 8 月に、30 周年記念式典は 2005（平成 17）年 12 月に行われています。

30 周年記念式典の折には、関係者の消息の確認とともにサマーキャンプ 30 周年によせてメッセージをよせていただきました。それらのメッセージは会場に掲示させていただき、参列のみなさまの話題の種になっておりましたが、その後ずっと埋もれてしまっておりました（「30 周年記念誌を作ろう」といいながら 10 年たってしまった……）。

今回、サマーキャンプ 40 周年記念誌をまとめるにあたり、これらのメッセージもキャンプを支えてくださる方々の大事な歴史として、掲載させていただくこととしました。

※メッセージのお名前に★がついているのはキャンプ参加者または卒業生です（式典当時）※

★30 周年記念式典メッセージ★

第 1 回から 10 回目位までの思い出が特に強烈です。

よくぞここまで続いて開設されたものと開設者の皆様とともに大いに喜びたい。ご苦労さまでした。

これからも永遠に継続されますように。現在は、いぜんとして現地で内科開業医としてやっています。糖尿病の患者様がますます増えていて、どのようにお付き合いしていいのか苦心しています。ポストキャンパーの諸君にはヤング糖尿病の会（つばさの会）との接点をぜひ深めてほしいと思っています。サマーキャンプ運営にも積極的にかかわってほしいのです。
(高松 弘明)

小学校 5 年～高校 2 年まで、キャンパーとして参加してきましたが、毎年いろいろな企画で、とても楽しく過ごすことができました。大学生からは、学生ボランティアとして参加することによって、企画・運営をしていくことの難しさや大変さを知りました。20 歳になった今でも、毎年サマーキャンプの日が待ち遠しく思っているのです。これからも楽しみにしています。現在は、石川県立看護大学 3 年。月に 1 度金大病院に通院中。元気です。これからも、「サマーキャンプに来てよかった」「また来年も来たい」と思ってもらえるようなキャンプにしていってほしいと思います。

(★石井 千絵)

帰学日の1日だけ参加して、ささやかなお手伝いをしていました。

打ち上げのパーティーには皆出席だったと思います。海水浴での真田先生の水着姿が今でも目に焼き付いています。医短3人娘（今おばさん？）の活躍ぶりが印象的でした。

（不謹慎な思い出ばかりですみません）。平成4年の秋から、今の黒部市民病院にいます。富山の小児ヤングサマーキャンプのお世話をしていますが、今でも北陸小児サマーキャンプをお手本にしています。お互いより良いキャンプを目指してがんばっていきましょう！（家城 恭彦）

毎回×2 楽しみにしていました。キャンプが始まると1日1日があっという間に過ぎていく感じです。

自分1人の考えで悩んでいたのがたくさんの仲間のおかげで助け合えてることが一番のささえであり、一番の思い出です。現在は、仲間の悩みを聞くことができるようになりました（個人的に）。仕事は充実してないです。私も色々な人に助けられています。これからもこのキャンプで仲間をつくっていきたいと思っています。（★川合 亜希）

小学校3年生の夏休みに初めて参加し、自分でインスリンを打つ事ができたのを覚えます。

毎年夏休みキャンプへ行くのを楽しみにしておりました。同じDMの子が北陸三県にたくさんいるのに驚きと共に励みにもなった様な気がします。主人と子供二人（長女6歳、次女4歳）、実父、実母と生活しております。発病して28年、今のところ合併症もなく元気しております。（★山作 真由美）

白山登山が心に残っています。あの時見た星空は、忘れることはないと思います。

現在、主人と4歳の娘と3人で、約2年前から浦安に住んでいます。主人の転勤があればいずれまた北陸へ帰る予定です。結婚と同時に仕事を辞め、専業主婦です。娘も保育園へ通うようになり、家でできる仕事を少しずつするようになりました。自分の体調に合わせて生活できるのでコントロールも比較的良好です。実行委員会の皆様、いろいろとお世話してくださり、ありがとうございます。こんな遠方に住む私にまで連絡していただいて感謝しております。キャンプで一緒に過ごした皆様がお元気でお過ごしなのかとても気にかかります。（★上 恵美子）

北陸小児糖尿病サマーキャンプ30周年記念式典記念事業の実行委員の名前を拝見しているとキャンプ発足当初の頃が思い出されてきます。またポストキャンパーの皆様がそれぞれ生長され、各種分野で活躍されていることを言伝で知り、嬉しく思っています。

（澤田 大成）

サマーキャンプの思い出いろいろあります。その後、皆さんがどのように成長されているのか、お目にかかれるのが楽しみです。

岡山県立大学保健福祉学部看護学科で教授をしています。昨年は糖尿病教育看護学会でサマーキャンプでの話しをきいてなつかしく思いました。（小野 ツルコ）

肝試しなどが楽しかった。夜友達と話していたのも楽しかった。現在は、部活を頑張っています。 (★久米 あすか)

サマーキャンプの最初のころ、血糖測定が大変だったことがまず思い出されます。今のように便利な簡易測定器がなく精度ももう一つで大学病院まで血糖測定に走ったことも思い出されます。インスリンも種類が少なく、今のような頻回注射をする人も少なく、コントロールができず成人になって合併症に苦しんでいた患者さんの姿が悔やまれます。しかし、糖尿病の子供やスタッフと一緒に毎夏の記憶は楽しい思い出でもあります。現在は、糖尿病専門医というより患者全般をみる総合診療医として大学病院で診療、教育、研究をしています。しかし、糖尿病患者さんは心身を含めていたるところに異常が出るため、糖尿病患者さんの診療も他の患者さんと同じように行っています。30年間、夏はサマーキャンプが在るものと過ごしてきました。これからもお手伝いできればと思っています。

(小泉 順二)

小さい子供たちの笑顔が素敵でした。自宅近くに開業しました(平成16年4月～)。

また遊びに来て下さいね。近い将来、より簡単にQOLの良い治療法が開発されるでしょう。 (永井 幸広)

喜怒哀楽でしたね。現在は、生活習慣病にならないよう努力しています。自立することです。 (鈴木 祐吉)

夏休みの最大の出来事で、毎年すごく楽しみにしていた行事でした。一年に一回、あまり会うことができないサマーキャンプで出会った友達に会ったり、スタッフの皆さん、先生達が今となってはすごく懐かしいです。4年前より東京で働いています。機会があればサマーキャンプにも参加したいと思っ

ていますが、なかなか出席することもできず、残念にいつも思っています。昔の仲間とまた会えることがあったら会いたいなあ・・・っ

て思っています。何かあったらまた連絡ください。 (★浦城 三奈代)

4歳に発症し、4歳の夏からの参加で今年で5回目の参加でした。母親の私から全く離れなかったのですが、1回目の参加の帰り道の車の中で、「まだおりたい」と言って大泣きしていたことを思い出します。

年々成長していく子供の姿を見るのが楽しみです(出し物の発表会などで)。毎年キャンプの参加を楽しみにしておりました。これからも末長くキャンプが続きますよう祈っております。 (★七野 亜記)

看護師として、病気をもちながら頑張っている方々のお役に立てるよう日々努力しています。30周年にもなる歴史ある北陸小児糖尿病サマーキャンプに関わることができとても光栄に思っています。年々、このサマーキャンプの歴史の深さを感じています。参加者の方々、ポストキャンパーの方々、様々なボランティアの方々、皆がこのサマーキャンプをさらにもりあげて発展させていけたらと思っています。 (土本 千春)

ソフトボールや花火などよく遊びました。現在は元気でやっています。特にかわりありません。(★田所 猛)

幼い頃は、稲垣先生などに大変迷惑をおかけしたことしか覚えていません。しかし、サマーキャンプの内容は毎回楽しいものばかりで、毎年皆さんにお会いできることがとてもうれしいものでした。サマーキャンプは自分達にとっての大きく成長できた場でした。今は准看護師の資格のために看護科に通っている最中です。私も稲垣先生のような明るい医療従事者になりたいと思っています。皆さんとお会いできる事をとても楽しみにしています。もう私もDMにかかって10年がたちます。これから先、辛いこともあると思いますが、のりこえていきたいと思っています。私が小児糖尿病になってから約10年となります。サマーキャンプには8回程出席させて頂きました。キャンパーの皆さんには、いつも大変お世話になっています。あんなにませたチビガキがと思われる方も何人かいらっやると思います。(★橘 愛美)

子供たちとふれあえたのがとても楽しかったのですが、何より、苦悩されている御両親のお言葉をうかがうことができたのが印象的でした。とても勉強になりました。

2005年4月から総合診療部外来で、いわば「よろず相談所」をしております。(北谷 真子)

プールで泳いでドクターと競争して私が勝った時、ドクターはむきになって泳いできた時が、とてもおもしろかったし、楽しかったです。また、皆でおどったことも、とても楽しかったです。中3なので高校受験、今が一番大切な時です。それで、今年のサマーキャンプは参加したかったけど、時間がとれなくて不参加でした。なにしろ今は、体調をととのえて頑張るだけです。実行委員会の方々やボランティアの方々のおかげで、楽しく過ごさせて頂きましたし、勉強もたくさんしてもらい、不安だらけの中で一つの光を見ました。生きていくための知恵を勇気もらったようで頑張らなくては・・・という気持ちになりました。(★新納 愛美)

サマーキャンプが近づくと“なぜ？”というくらい血糖値が下がり安定します。本人は何も言いませんが、心のそこから楽しみにしているようです。キャンプでは“みんな同じ”が「うれしい」と言っています。「いつまでもキャンプが続くといいな～ オレも成長したいし～」と帰ってくると少し大きくなったと感じています。毎日マイペースで学校へ行っています。“特別ではなく普通に生活できるのだから！”と言っても“オレの体のことはオレにしか分からない！何も言わないで”と・・・。心も体も安定しないときがあるようでケンカが多くなっている今日この頃です。今年で2回目のサマーキャンプでしたが、息子はキャンプ中が一番ラクチンと言って来年のキャンプをもう楽しみにしております。色々な方のお話を聞け助かっております。どうぞ皆様お体を大切になさって下さい。

(★今村 宗一郎)

思春期の頃だった事もあり、素直に病気を受け入れられない自分もありました。心が救われたこともたくさんありました。現在、結婚し、1児の母です。出産は無理かと思っていた頃もありましたが、何事もなく元気な子を産むことができました。妊婦の時は、まわりに同じ立場の人がおらず、不安なことではありました。これから出産のことを考えている方の力になればいろいろお話ししたいです。
(★有岡 和美)

サマーキャンプの思い出はいつも体調が悪くなったりしてつらかったです。現在は学校に通いながら、将来やりたい仕事に向かってがんばっています。参加できませんがみなさんががんばって下さい。
(★本田 広太郎)

地引網、各地への遠足、ヨサコイやフォークダンスなどのイベント、夜どおしの座談会などすべてが楽しかったです。中学生になり、吹奏楽部で11月の町の音楽祭に向けてパーカッションをがんばっています。他県からの参加でしたが、暖かくむかえ入れていただきありがとうございました。今年で最後といいながらも顔見知りが増えるにつれて楽しくて子供が大きくなって親がついていました。

本人は一人立ちしたかっただろうと今はかわいそうに思います。日々は孤独な戦いですが、キャンプではその疲れを癒してくれるパワーがあり、またがんばろうと思えます。これからも一人で多くの人々に力を与えるキャンプになってくれるように祈っています。

(★屋木 榛菜)

初めての白山登山の時でした。準備万端だったのですが、装備の荷物が重く、中腹で完全にばててしまい、散々な思いをしたことを忘れられませんが、今となっては楽しい思い出となっています。

現在は、富山の「豊田」というところで小児科を開業して6年目に入りました。9月に長男が結婚し、親の責任を一つ果たせたかなと思っています。尚、長男も次男も(双子)小児科医となっています。何かの機会に皆さんのお役に立てるといいのですが。会える機会を楽しみにしています。
(才田 耕基)

小学校の時は夏休みが待ち遠しく思えるほどキャンプが楽しみでした。

同じ病気の友達が沢山いて、Dr.をはじめスタッフの方々のおかげで低血糖も気にせず思いっきり遊べた気がします。海水浴や白山登山、キャンプファイヤーetc.思いではつきません。

眼底検査でドキドキしたり、糖尿病教室で勉強したりしたことも覚えています。家に帰ると「なんで自分だけ注射しなん」と悲しくなりましたが、母に「キャンプのみんなも頑張ってるよ」とはげまされていました。キャンプがあったから今の私があるんだなあ〜と思います。

現在は、主人の会社を5月に引き継ぐことになり、私は経理として6月から入ったのですが、2人で何とか頑張っています。小さいながらも従業員も10名ばかり居るので、毎日いろいろと大変ですが、最近少しずつ慣れてきて、やっと見習い→社員になれた気がします。20周年の時にお腹にいた子は、今4年生でバスケットボールを習っています。

(★林 律子)

第1回及びその後数回のサマーキャンプのキャンプ長を努めました。

当時、医局の理解が得られず、「お前ら何をしている。無駄なことをして」と文句をいわれました。

参加者も10数人と少なかったのですが、母親も寝泊りして家族的な雰囲気でした。母親から、自分のせいで子供が糖尿病になったと泣きつかれたのには弱りました。最終日のおわかれの会では、来年もまた会おうねと泣いて別れたのをなつかしく思い出します。4年前に金沢市内で開業し、主に糖尿病の治療をしています。小児の糖尿病の方はいませんが、最近第1回のキャンプに参加していた方が受診しておられます。(早川 浩之)

楽しいことがいっぱいありました。同じ病気を持った仲間です。色々なことをやるというのは、普段できることではなかったもので、それだけでもうれしかったです。仕事の関係で行けないのが非常に残念です。現在私は小さな薬局で調剤事務として働いています。病気を持っていることは皆知っています。だからと言って、すべて理解されているわけではないけれど、お互い歩み寄りながら一緒に仕事をしています。(★宮岸 史子)

友達と久々に会えてうれしかった。始めは全然しゃべれなかったけど、後からどんどんしゃべって友達も増えてよかった。とっても楽しかった。(★若林 稜子)

すごく楽しくのびのびと充実していたなあ

と、振り返ってみるとそんな印象です。夜中に低血糖発作がおきたことや、テントを張った年などは睡眠不足の限界だなあと思ったことを印象深く覚えています。

他にもいろいろあって、話し出したらきりがながいかも。みんなの顔が浮んできます。長い間キャンプにかかわらせていただいたことは、本当に貴重な思い出です。

ここ2,3年はキャンプには数時間のみの参加です。石川県立看護大学で看護師などの教育にたずさわっています。なつかしいです。いつまでも居心地のよい場所であって下さい。(西村 真実子)

小さい頃から参加させてもらってました。中学校で最後だったかと思います。昔懐かしくて、すごくあれこれと思い出があります。白山のことが思い出されます。その後も何回か白山登山する機会があり、昔に付き添ってナビをしてくださった男の方が山に詳しくて、初日の出の場所へ行ったのをすごくうれしかったのを覚えてますし、あれこれとかげめぐります。

只今、金沢市です。ここに来て3年目です。結婚して6年経ち、子供も2人恵まれました。転勤族の夫であちこちと転々としています。コントロールはまずまずでしょうか。あまりよくないかも。合併症も今のところ眼のA1のみで(産後より出ました)きています。

(★小林 淳子)

最初にキャンプに参加したのは9年前です。小泉順二先生に誘われて最初は渋々でしたが、元々子供達が楽しそうにしているのは好きで気が付けば毎年参加してました。一番印象に残っているのは臍島移植について話をしたことです。「せんせーあの実験くんやりたいー！」との反応があったと稲垣美智子先生からお聞きしました。そのとき感じた“キャンプに来ている子供たちが合併症で嫌な思いをせずに生きて行けるような研究をしたい”という思いはジョスリン糖尿病センターの留学につながってます。ボストンに来てジョスリンのキャンプにも参加しましたが、参加している子供達の元気な（騒々しい）事には驚きました。ポストキャンパーも皆体は大きいし鍛えられていて合併症に悩まされている人は少ないようです。糖尿病の治療はアメリカでも決して楽ではないわけですが、81年にわたり取り組んで来た成果かと感じました。ジョスリンに来てキャンプ以外でも様々な経験をすることができました。もちろんすべてでアメリカが進んでいるわけではないです。むしろ日本なり、北陸なりのやり方が出てこないと本当に自分のものになったとは言えないように思います。ただ「頑張る事が報いられるように」という願いは変わりません。これからもそれを目指していきましょう。

(八木 邦公)

勇気づけられ、楽しく過ごせたと思います。学生ボランティアとして参加してからは少しでも子供たちの力になれたことがうれしかったです。現在、臨床検査技師の資格をとるために勉強しています。皆さんに久しぶりに会えるのを楽しみにしています。いろいろとお世話になりありがとうございます。サマーキャンプは本人や家族にとっても大切なものだったと思います。これからもずっと続けていって欲しいと思います。

(★垣内 裕介)

親同士の交流があり話していると気持ちが楽になるし、情報交換もできてとても勉強になるので毎年行きたいと思います。キャンプ中、母は怒らないので子供はいつもよりのびのびとっても楽しそうです。今は幼稚園の年長さんです。幼稚園がとっても大好きで体力もついてほとんど休むことなく通っています。来春から小学校へ入学します。本人はドキドキ・ワクワク楽しみにしていますが、親はとっても心配です。サマーキャンプに毎年参加するつもりでいます。

(★笹山 ユリア)

仲間が増えた！！ 毎年楽しみにして参加している！ これからも機会、予定があれば参加したい。現在、高校生活を楽しんでます。サッカーがんばっています！その日、予定があり参加できません。残念！（都ホテル、中学の宿泊学習でNとRを間違えて大事件をおこしたところです！ 思い出ただけでもゾ～！）。

(★西田 圭吾)

子供の頃は病気を隠しての生活だったので、唯一隠し事をせずに同じ境遇の友達と接することのできる5日間でした。そして他の人たちが病気についてどのように捉え、考え、感じているかを知ることができるとても良い機会でした。職場（保育園）の1歳児を見ると、「私はこんなに小さくまだ何も分からない時期に発病し、ずっと注射をしてきているんだな・・・」と思い、いたたまれない気持ちになることがあります。DM歴33年になりますが、とにかく注射が嫌い（ご存知の方もあるとは思いますが・・・）私の大きな大きなストレスとなっています。

皮膚からの「吸収」あるいは内服薬などの「痛くない」薬の開発をとにかく望んでいます。・・・はいはい分かってますよ。できないんでしょ？ わかってますよお・・・。
(★水木 恵美子)

昭和50年代は、お母さん達や栄養士さんと一緒に食事を作っていた。私は食事班の責任者として（役割分担）毎朝遅刻せずに起きてごはんを作れるだろうかと心配だったことが懐かしい。当時100人以上の食事を作っていたのが、今思えば本当にすごいことだったなと思います。一緒に料理を作っていたお母さん達とまたお会いしたいものですね。

現在は、石川県立看護大学であいかわらず忙しくしていますが、キャンプで培ったチームワークの大切さや、人間関係づくりの大切さ、そして何よりも食の大切さを実感しています。若い人達に伝える役目かと思っています

す。小さかった光田クンや伸ちゃんが、もうこんな役割をするのですね。今でこそキャンプにかかわることが少なくなりましたが、内灘の空の下と海で過ごしたキャンプは、やはり私にとっても青春でした。ボランティアを超えた何かがありました。皆様のますますのご健康とご活躍祈念します。

(川島 和代)

初めて病気になり不安な頃このサマーキャンプを知り参加しました。みんな同じ年頃で同じ病気だと思えば、とても気持ちが楽になったことを覚えています。色々な場所に行き、白山に登ってご来光を見たり、キャンプをし夜友達とおしゃべりなどキャンプには楽しい思い出ばかりです。

ボランティアの人にも良くしてもらったこともうれしかったことです。毎年キャンプが待ち遠しく別れの日はとても悲しく涙したことは今でも忘れられません。

去年一緒にきていた母を亡くし、私も目を悪くしましたが、今は立ち直り毎日忙しく働いています。目を悪くし、今後も不安ですが、がんばっていきたいと思います。キャンプ以来みんながどう変化したのか、とても会いたかったのですが、仕事の都合で行けないのが残念です。みんなが元気であればとてもうれしいです。先生方にもキャンプではお世話になったので今の私を見てもらいたかったです。

(★伊藤 亜紀子)

第1回か第2回目のサマーキャンプに参加させていただきました。小学校5～6年ぐらいでした。

自分の病気と同じ仲間がいたことがうれしく、その後の励みになりました。彼女達とはサマーキャンプ以外でも会っていたのを覚えています。皆それぞれ母になったときいて安心していました。また、お世話してくださった多くの先生方や学生さんの当時の顔が今でも思い浮かびます。「私達のためにこんなに人が集まって企画してくれたんだ」と思って「みんなボランティア精神がスゴイ」と思ったことも覚えています。今は小1・小4の男の子の母となり、また、中学校の教員としても働かせていただいております。この先はどうなるかわからない身体ですが、今、普通の人の同じように暮らせることに日々感謝しています。7000円という高い参加料で参加を遠慮させていただきました。できれば3000円ぐらいのお手ごろ価格だと参加できたのでは・・・と思います。わがままを承知で書かせていただきました。失礼をお許してください。

(★浦野 慶子)

周囲の人たちとなかなかなじめなくて大変だった。野間先生という方がとても楽しい方だったのを記憶している。小野先生には家をたずねて頂いたりとてもお世話になりました。

現在は北陸病院の夜間透析を受けながら昼間はパートで事務職をしております。体調も良く元気しております。昔一緒にサマーキャンプに参加していた林さんや名前ができませんが、顔は覚えている子たちはどうしているのかしらと思います。一緒にスイカ割りをした水木さんが運営委員としてがんばっておられることを知り、懐かしさがこみ上げてきました。

(高山 公美)

いっぱい夜更かしをしていつも寝不足だったけど、すごく楽しかった。今は中学1年生でバドミントンをしている。サマーキャンプをずっと続けて欲しい。

一年間、サマーキャンプの日を楽しみにしています。

(★吉野 真央)



★40周年記念式典メッセージ★

参加させていただいたのは数回ですが、いつもキャンパーの皆さんに“パワー”をもらっていたように思います。これからも、このサマーキャンプが、皆さんにとってのかけがえのない“場”でありますように（東 雅代）

40年！

本当に長い間、ご苦労さまでした。

“継続は力なり”を実感します。

Mission, Passion, Actionの絆ですね。

（天津 栄子）

私がサマーキャンプに初めて参加してからもう30年もたつんですね……。ビックリです。（★浦城 三奈代）

少しでしたが、係らせていただき、とても楽しかったです。

この会のますますのご発展を願っております。（加藤 真由美）

発病して33年。元気に暮らしています。いつも見守り支えてくださった皆様に心から感謝しております。

娘が中学生になり吹奏楽をがんばっているの、私はその応援をする毎日です。

（★上 恵美子（旧姓；荒井））

「とまり木」にまつわる人々のこれまでも、これからも、いい日が続きますように、お祈りしています。（高木 千絵）

私がかかわったのは、昭和57～62年、平成8～11年の計11年間くらいでしょうか。いずれも食事班として台所を預かりました。栄養士のみなさんやお母さん達と早朝から食事をつくったこと、夜食の準備、低血糖への対応のための食べさせるものの選択・・・なつかしい思い出です。サマーキャンプで体験したことが、その後の職場でもチームワークを大切に過ごす大切さを教えてもらいました。（川島 和代）

私がサマーキャンプに参加したのは、今年で9回目になりました。来年でキャンパーとしての参加は終わりますが、それ以降も協力していきたいと思います。（★河波 紗奈）

つぼみの会のこれからのますますの発展と皆様方の御活躍をお祈りしています。

（河村 一海）

参加させて頂いた3年間がなつかしいです。多くの方の協力があったからこそ楽しめました。40周年とお聞きしてその長さに驚きました。子ども達やそのご家族の憩いの場として、続いてほしいと思います。

（黒澤 杏里（旧姓；犬丸））

サマーキャンプの体験、懐かしく思います。多くの方の支えとなるサマーキャンプの発展を祈念しております。（杉本 洋）

10周年に参加して早くも30年が過ぎたことになりますね。50周年を目指して継続して下さい。
(犀川 太)

サマーキャンプでのボランティアの経験が、今の仕事の原動力となっています。友情、信頼、そして尊敬といった人としての根幹をあの凝縮したサマーキャンプから学びました。
(真田 弘美)

40年の長きにわたり、小児1型DM患者・家族のみならず、メディカルスタッフの教育の場としてもサマーキャンプは欠かせない存在となっております。
(徳丸 季聡)

私が当病院へ就職した6月。当時、金沢大学医学部附属病院の故太田栄養管理室長からご自宅での勉強会を開催して頂き、その8月、金大辰口研修センターから参加させて頂きました。皆様の笑顔と行事の時間を共有することによりすべてが五感で教えられたことを今でも鮮明に覚えています。「医療」は、教えて頂くことが原点と教わりました。先代の方々が発足への熱意、情熱が永遠に続き、近い将来糖尿病が完治できる医療が確立することを心から祈念いたします。
(中川 明彦)

スタッフの方々の並々ならぬご努力の賜物ですね。

今も参加された方々の元気な笑顔が忘れられません。絆を感じます。
(中田 恵子)

大先輩の高松先生と参加していた頃を思い出します。ますますの発展を祈念します。
(能登 裕)

現在、色々合併症も有りますが、元気にやっております。昨年より京都の学校に(夜間4年制)にトライしてがんばっております。サマーキャンプにお世話になった事で、強い子になりました。(★野村 泉(旧姓;西野))

昭和51年、たぶん第2回目からだったと思いますが参加していました。

記念パーティ当日にはぜひお祝いに伺いたいのですが、アメリカ在住のため残念ながら参加できません。遠く離れた大陸より皆様の益々のご活躍を祈念しております。

(★長谷川 恵美(旧姓;水木))

30周年で集まったのがついこの間の様に思えます。小学3年生だった息子が春から大学生となり、京都で一人暮らしをしています。

(★林 律子)

物心つかない頃から大変お世話になりました。楽しい思い出がたくさんあります。

報告が遅れましたが、一昨年の秋に結婚しました。まだまだ未熟者なので、仕事と家事でてんてこまいです(笑)。

(★原 史子(旧姓;宮岸))

創立記念式典から

たくさんの人々の協力と熱い思いによってここまで続いたこと、本当にすごいなあと思います。

稲垣先生のご尽力と人を集める力、発想力、稲垣研究室のパワフルで温かい先生方、一生懸命な学生さんたち、そのすべての賜物ですね。サマーキャンプが発展し誰かのために受け継がれていくことを心よりお祈り申し上げます。（平間 裕子（旧姓；篠塚））

短い期間ですが、サマーキャンプに参加し、懐かしい思い出が浮かびます。テント立て、カレー作り、肝だめし、おまけに新車がガケから落ちそうになった事などなど・・・。（丸山 博昭）

私はサマーキャンプにほんの一時関わっただけですが、今でも当時の事は鮮烈に記憶しています。キャンプでの経験を、現在までの糖尿病診療に少しでも生かせたのではないかと考えています。キャンプ創設当初から関わられた先生方、スタッフの皆さんのご苦勞に思いをはせると同時に、キャンプで育った沢山のヤング達の益々のご健康を祈ります。

（宮越 久嗣）

こんにちは～！！ずいぶんと・・・御無沙汰しております。

皆様いかがお過ごしでしょうか？

二人娘が中三、中一になり、お陰様で親子共々？！元気だけがとりえて、日々励んでおります。又、同期の方々とお逢い出来る日楽しみにしております♡（★山作 真由美）



データで見るサマーキャンプ 40 年

★開催地 & スケジュール 編★

第 1 回	1975 年 (S50) 8月6日~10日	4泊5日	内灘町福祉センター「憩」
キャンプ生活を楽しく			
開村式・映画鑑賞 自己学習 水泳 ピンポン 花火大会 ピクニック スポーツ バーベキュー キャンプファイアー 自己学習 水泳 ピンポン キャンドルサービス 作文			
第 2 回	1976 年 (S51) 7月28日~8月1日	4泊5日	内灘町福祉センター「憩」
体力の限界に挑戦			
開村式 花火大会 自己学習 健民プールにて水泳 ピクニック スポーツ バーベキュー キャンプファイアー 海水浴(網引き スイカ割り 宝探し) キャンドルサービス 作文			
第 3 回	1977 年 (S52) 7月27日~31日	4泊5日	内灘町福祉センター「憩」
血糖の自己測定 体力の限界に挑戦しよう			
開村式 散歩 市営プールにて水泳 遊戯 映画鑑賞 散歩 バーベキュー キャンプファイアー 花火大会 海水浴(網引き ゲーム 宝探し) スポーツ大会 お別れ演芸大会 作文 スポーツ大会			
第 4 回	1978 年 (S53) 7月26日~30日	4泊5日	内灘町福祉センター「憩」
運動療法			
開村式 サイクリング バーベキュー キャンプファイアー 海水浴(水泳 網引き スイカ割り 宝探し) ソフトボール大会 お別れ演芸会 作文			

データで見るサマーキャンプ 40 年

第 5 回	1979 年 (S54) 7 月 26 日~30 日 4 泊 5 日	内灘町福祉センター「憩」
体力の限界に挑戦		
開村式 プール ソフトボール 奥卯辰山へ(フィールドアスレチック バーベキュー) キャンプファイアー キャンドルサービス 海水浴(内灘海岸) ソフトボール サイクリング お別れ演芸会 ソフトボール(決勝戦)		
第 6 回	1980 年 (S55) 7 月 28 日~8 月 1 日 4 泊 5 日	内灘町福祉センター「憩」
食事をみなおそう		
開村式 プール ソフトボール 獅子吼高原登山 海水浴(内灘海岸) ソフトボール キャンプファイアー ソフトボール(決勝戦)		
第 7 回	1981 年 (S56) 7 月 29 日~8 月 2 日 4 泊 5 日	内灘町福祉センター「憩」
自分の事は自分でしよう		
開村式 獅子吼高原登山 肝試し 海水浴・スイカ割り(内灘海岸) ソフトボール 運動会 キャンプファイアー 花火 ソフトボール サイクリング		
第 8 回	1982 年 (S57) 7 月 28 日~8 月 1 日 4 泊 5 日	内灘町福祉センター「憩」
自分の体力に自信を持とう		
開村式 運動会 体力測定 金沢競馬場へピクニック 飯ごう炊飯 希望者は白山登山 自由時間 キャンプファイアー ※全国のサマーキャンプでも先駆けとして本格的な夏山登山(白山)が始まった。		
第 9 回	1983 年 (S58) 8 月 2 日~7 日 5 泊 6 日	内灘町サイクリングターミナル
血糖の自己測定 体力の限界に挑戦しよう		
開村式 工作 運動会 白山登山 津幡森林公園にて飯ごう炊飯 自由時間(オリエンテーリング・サイクリング・ソフトボール・ゲーム・料理・写生・詞歌作りなど) 海水浴・スイカ割り・宝探し・浜遊び キャンプファイアー		

10 回	1984 年 (S59) 7月31日~8月5日 5泊6日	内灘町サイクリングターミナル
血糖の自己測定をしよう。運動の習慣を身につけよう		
開村式 オリエンテーリング 体力測定 ゲーム ソフトボール 天体観測 白山登山 屋外活動・健民プールにて水泳 大野湊神社へサイクリング 球技大会 ミニコンサート バスハイキング キャンプファイアー		
第 11 回	1985 年 (S60) 7月30日~8月3日 4泊5日	金沢市青年の家 医王山スポーツセンター
食事の単位計算をできるようになろう。 自然に親しまう		
開村式 白山登山 海水浴 キゴ山ハイキング 野外キャンプ 野外炊飯 キャンプファイアー		
第 12 回	1986 年 (S61) 8月6日~10日 4泊5日	医王山スポーツセンター
食事療法の見直し 注射部位の拡大		
開村式 白山登山 肝試し 海水浴 天体観測 テント生活 野外炊飯 オリエンテーション テント生活 野外炊飯作り キャンプファイアー		
第 13 回	1987 年 (S62) 7月27日~31日 4泊5日	医王山スポーツセンター
自分の力でどこまでやれるかやってみよう 自然に親しんでお互い深く知り合おう 食事をつくろう たくさんともだちつくろう		
開村パーティ 白山登山 肝試し 海水浴 天体観測 テント生活 野外炊飯 オリエンテーション テント生活 野外炊飯 キャンプファイアー		
第 14 回	1988 年 (S63) 8月3日~7日 4泊5日	医王山スポーツセンター
食事をうんと楽しもう 自分でわかろう、低血糖		
開村パーティ 白山登山 肝試し 海水浴 テント生活 野外炊飯 キャンプファイアー		

データで見るサマーキャンプ 40 年

第 15 回	1989 年 (H1) 8 月 6 日～10 日 4 泊 5 日	石川県青年会館 医王山スポーツセンター
自分のことを考えよう、自分のためにやってみよう		
開村パーティ 白山登山 フィールドアスレチック お楽しみタイム 海水浴 テント生活 野外炊飯 キャンプファイアー 班対抗だしもの大会		
第 16 回	1990 年 (H2) 8 月 1 日～5 日 4 泊 5 日	松任市青少年宿泊センター
見つけよう・伸ばそう、自分の得意わざ		
開村パーティ 白山登山 総合運動公園・文化体育館にてスポーツ大会 手作り作品作り 内灘はまなすにて海水浴・砂の造形大会・スイカ割り・コンサート 津幡森林公園にて野外炊飯 フィールドアスレチック 班対抗お楽しみ大会 花火大会		
第 17 回	1991 年 (H3) 8 月 6 日～10 日 4 泊 5 日	金沢ふれあいの里
早めに低血糖を自分でみつけよう！		
開村パーティ 白山登山 スポーツ大会 工芸 内灘にて海水浴・宝探し コンサート 野外炊飯 キャンプファイアー 班対抗出し物大会 花火大会		
第 18 回	1992 年 (H4) 8 月 5 日～9 日 4 泊 5 日	金沢大学辰口共同研修センター
新発見。再発見！！ いまできることに情熱をそそごう！！		
開村パーティ 体育館でドッチボール大会 陶芸教室（絵付け） 尾口村へピクニック バーベキュー コンサート クイズ大会 海水浴 さよならパーティー 安宅の関にてキャンプファイアー ※台風来襲による天候悪化のため予定を 1 日短縮。海水浴はプールに変更、キャンプファイアーは中止となった。		
第 19 回	1993 年 (H5) 8 月 4 日～8 日 4 泊 5 日	金沢大学辰口共同研修センター
小さな経験 大きな感動		
開村パーティ 白山登山 体育館にてスポーツ大会 一里野ピクニック ウッディカントリーで工作 塩屋海岸にて海水浴 さよならパーティー		

第 20 回	1994 年 (H6) 8 月 3 日～7 日 4 泊 5 日	金沢大学辰口共同研修センター
先輩たちの経験に学び自分らしい管理方法を育てよう		
開村パーティ 医王の里にてバンガロー宿泊 二俣紙すきの里・古里館見学 コンサート 辰口丘陵公園へピクニック 安宅の関にてキャンプファイヤー		
第 21 回	1995 年 (H7) 8 月 2 日～5 日 3 泊 4 日	金沢大学辰口共同研修センター
発見しよう自分の色		
開村パーティ ドッチボール大会 ミニコンサート 安宅の関にてキャンプファイヤー 塩屋海岸にて海水浴 肝試し 伝統工芸教室 (和風作り)		
第 22 回	1996 年 (H8) 11 月 23 日～24 日 1 泊 2 日	内灘町サイクリングターミナル
短期集中！先輩に学ぼう		
開村パーティ 屋外で T シャツ作り コンクール ※病原性大腸菌の流行によりサマーキャンプ中止、秋キャンプ施行		
第 23 回	1997 年 (H9) 8 月 26 日～29 日 3 泊 4 日	金沢大学辰口共同研修センター
自分の血糖値を考えよう		
開村パーティ 工芸 (うちわ製作) 肝試し 津幡森林公園へピクニック 内灘にてキャンプファイヤー コンサート		
第 24 回	1998 年 (H10) 8 月 20 日～23 日 3 泊 4 日	内灘町福祉センター「憩」
自分の気持ちを言葉にしてみよう		
開村パーティ 工芸 バーベキュー サイクリング 肝試し バスハイク (いこいの村能登半島・アリス館志賀・千里浜ドライブウェイ) 内灘にてキャンプファイヤー コンサート		
第 25 回	1999 年 (H11) 8 月 19 日～22 日 3 泊 4 日	内灘町福祉センター「憩」
コントロールのカンを身につけよう		
開村パーティ 工芸 (ラミネート加工) スイカ割り バーベキュー 肝試し 加賀市中央公園へピクニック キャンプファイヤー コーラス コンサート		

データで見るサマーキャンプ 40 年

第 26 回	2000 年 (H12) 8 月 23 日～26 日 3 泊 4 日	内灘町福祉センター「憩」
自分達の成長を感じよう		
開村パーティ 工作 バーベキュー 肝試し ハイキング (辰口丘陵公園・いしかわ動物園) キャンプファイアー コンサート		
第 27 回	2001 年 (H13) 8 月 16 日～19 日 3 泊 4 日	内灘町福祉センター「憩」
先輩達に学ぼう		
開村パーティ 工作 地引き綱 肝試し バスハイク (白山恐竜パーク) キャンプファイアー コンサート		
第 28 回	2002 年 (H14) 8 月 21 日～24 日 3 泊 4 日	内灘町福祉センター「憩」
みんなの力がキャンプの“わ”		
開村パーティ 工作 バーベキュー 肝試し ピクニック (森林公園へ たま入れ・綱引き) ソーラン踊り大会 コンサート		
第 29 回	2003 年 (H15) 8 月 20 日～23 日 3 泊 4 日	内灘町福祉センター「憩」
輝け個性、みんなの力で大きな花を咲かせよう！！		
開村パーティ プール 工作 (うちわ作り) マジック教室 バーベキュー 肝試し キゴ山ふれあいの里 (プラネタリウム鑑賞) マジック・踊り発表会 大道芸人パフォーマンス コンサート		
第 30 回	2004 年 (H16) 8 月 18 日～21 日 3 泊 4 日	内灘町福祉センター「憩」
友だち同士でかわしあおう あらたな知識・役立つ智恵		
開村パーティ プール 工作 バーベキュー 肝試し トランポリン大会 花火大会 コンサート		
第 31 回	2005 年 (H17) 8 月 24 日～27 日 3 泊 4 日	内灘町福祉センター「憩」
自然について考えよう		
開村パーティ プール 工作 肝試し バスハイク (のとじま水族館) 花火大会 コンサート		

第 32 回	2006 年 (H18) 8月17日~20日 3泊4日	内灘町福祉センター「憩」
食を楽しむ・バランスを学ぶ		
開村パーティ 角間の里で自然体験 (工作) 肝試し 手作りおやつ教室・バイキング プール サマーキャンプワールドダンスカップ 花火大会 コンサート (尺八演奏)		
第 33 回	2007 年 (H19) 8月22日~25日 3泊4日	内灘町福祉センター「憩」
プロから学ぼう! ー体を鍛える・料理上手になるー		
開村パーティ 工作 セバタクロー 肝試し 手作り料理教室 プール まるまるまるちゃん★ダンスコンテスト 花火大会 コンサート		
第 34 回	2008 年 (H20) 8月6日~9日 3泊4日	内灘町福祉センター「憩」
仲間と一緒に育ち合う		
開村パーティ 手作り料理教室 野球教室 肝試し 工作 プール ダンスコンテスト 花火大会 コンサート		
第 35 回	2009 年 (H21) 8月19日~22日 3泊4日	内灘町福祉センター「憩」
なかのよいともだちをたくさんつくりましょう		
開村パーティ プール 工作 肝試し 手作り料理教室 ダンスコンテスト ウォーキングスタイリスト大集合 花火大会 コンサート		
第 36 回	2010 年 (H22) 8月18日~21日 3泊4日	内灘町サイクリングターミナル
学校での生活をみんなで話し合ひましょう		
開村パーティ プール 工作 肝試し 手作り料理教室 ダンスコンテスト 花火大会 コンサート		
第 37 回	2011 年 (H23) 8月17日~20日 3泊4日	内灘町サイクリングターミナル
元気もりもり、個性きらきらみんなでつなごう心のわ		
開村パーティ プール 工作 肝試し 手作り料理教室 武道大会 ダンスコンテスト 花火大会		

データで見るサマーキャンプ 40 年

第 38 回	2012 年 (H24) 8月10日~13日 3泊4日	内灘町サイクリングターミナル
見つけよう、みんなの輝く良いところ		
開村パーティ プール 工作 肝試し 手作り料理教室 ジャグリング&グループパフォーマンス 花火大会		
第 39 回	2013 年 (H25) 8月10日~13日 3泊4日	内灘町サイクリングターミナル
つなごうみんなの手 つくりだそう心の輪		
開村パーティー プール 工作 肝試し 手作り料理教室 コンサート&グループパフォーマンス		
第 40 回	2014 年 (H26)	0 内灘町サイクリングターミナル
広げよう 学年をこえたみんなのつながり		
開村パーティー プール 工作 肝試し 手作り料理教室 アカベラコンサート&グループパフォーマンス ※キャンプ史上 2 回目の台風来襲。屋外で予定の行事を屋内に変更して乗り切った。		

★参加者 ボランティアスタッフ編★

回	年	参加	ボランティア
1	1975	12	52 医師(21)看護師(4)保健師(7)栄養士(9)教員(2)学生(3)その他(6)
2	1976	18	60 医師(20)看護師(2)保健師(3)栄養士(14)教員(4)学生(8)その他(9)
3	1977	20	132 医師(15)学生(45)看護師(25)栄養士(5)教員(15)センター(20)その他(12)
4	1978	29	88 医師(24)看護師(17)栄養士(11)教員(5)糖尿病協会(3)学生(24)MR(2)その他(2)
5	1979	35	62 医師(26)看護師(7)栄養士(12)糖尿病協会(3)学生(21)MR(2)その他(1)
6	1980	33	65 医師(10)看護師(10)栄養士(11)糖尿病協会(3)学生(22)OB(5)MR(2)その他(1)
7	1981	29	62 医師(25)医学生(2)看護師(6)教員(7)看護学生(14)栄養士(1)MR(3)OB(2) 糖尿病協会(2)
8	1982	36	63 医師(20)看護師(6)教員(6)栄養士(1)学生(17)OB(6)糖尿病協会(2)その他(5)
9	1983	26	58 医師(20)看護師(4)教員(6)学生(18)栄養士(1)OB(1)MR(6)糖尿病協会(2)
10	1984	24	57 医師(20)看護師(7)教員(6)学生(17)OB(2)栄養士(2)糖尿病協会(3)MR(2)
11	1985	29	57 医師(16)看護師(8)教員(6)学生(19)OB(2)栄養士(2)MR(2)糖尿病協会(2)
12	1986	26	68 医師(16)看護師(11)教員(5)学生(20)OB(-)栄養士(13)MR(-)糖尿病協会(1)その他(2)
13	1987	34	66 医師(22)看護師(11)教員(10)学生(-)OB(-)栄養士(19)MR(2)糖尿病協会(1)その他(1)
14	1988	23	58 医師(11)看護師(10)教員(9)学生(24)OB(-)栄養士(1)MR(1)糖尿病協会(1)その他(1)
15	1989	28	108 医師(22)看護師(14)教員(11)学生(19)OB(9)栄養士(27)MR(2)養護教諭(1)その他(3)
16	1990	25	105 医師(19)看護師(30)教員(-)学生(20)OB(2)栄養士(25)糖尿病協会(2)その他(7)
17	1991	31	103 医師(28)医学生(8)看護師(20)教員(6)学生(12)栄養士(12)栄養士学生(5)OB(8) その他(5)
18	1992	32	82 医師(16)看護師(15)学生(24)OB(6) 栄養士 (12) 糖尿病協会 (2) 他 (7)
19	1993	31	80 医師(-)看護師(-)医療栄養教師関係(40)学生(20)OB(5)栄養士(-)MR(-)養護教諭(-) その他(15)
20	1994	30	92 医師(14)看護師(19)学生(22)OB(7)栄養士(20)その他(10)
21	1995	-	85 医師(-)看護師(-)学生(-)OB(-)栄養士(-)MR(-)養護教諭(-)その他(-)
22	1996	20	48 医師(5)医学生(4)看護師(15)学生(10)OB(2)栄養士(2)その他(10)
23	1997	27	71 医師(10)医学生(4)看護師(19)学生(23)OB(2)栄養士(3)その他(10)
24	1998	25	82 医師(13)看護師(16)学生(16+10)OB(2)栄養士(12)その他(13)
25	1999	29	119 医師(21)医学生(7)看護師(29)学生(20)OB(3)栄養士(7)その他(32)
26	2000	20	78 医師(9)看護師(8)教員(10)学生(28)OB(3)栄養士(6)その他(14)
27	2001	22	93 医師(11)看護師(12)学生(35)OB(4)教員(9)薬剤師(3)薬剤師学生(1)栄養士(6) その他(12)
28	2002	18	71 医師(16)看護師(12)学生(21)OB(6)教員(4)栄養士(6)その他(6)
29	2003	23	40 医師(1)看護師(-)学生(19)院生(11)教員(5)栄養士(1)中学校養護教諭(2)その他(1)
30	2004	20	79 医師(10)医学生(1)看護師(19)学生(33)OB(7)教員(5)栄養士(4)

データで見るサマーキャンプ 40年

回	年	参加	ボランティア
31	2005	19	82 医師(9)医学生(3)看護師(20)学生(31)OB(8)教員(5)栄養士(6)
32	2006	16	70 医師(11)医学生(3)看護師(14)看護学生(19)院生(16)教員(4)OB(1)その他(2)
33	2007	11	73 医師(10)研修医(1)看護師(21)栄養士(1)教員(4)学生(18)院生(16)OB(1)その他(1)
34	2008	12	82 医師(7)医学生(1)看護師(19)学生(21)院生(14)教員(4)見学など(16)
35	2009	10	72 医師(13)看護師(20)教員(6+2)学生(18)院生(8)OB(2)その他(3)
36	2010	12	76 医師(8)看護師(30)学生(25)OB(4)院生(5)教員(4)
37	2011	12	81 医師(5)看護師(23)学生(15)OB(2)院生(10)教員(6)栄養士(5)MR(14)その他(1)
38	2012	16	83 医師(5)看護師(21)学生(12)OB(2)院生(14)教員(7)栄養士(3)MR(17)その他(1)
39	2013	19	101 医師(7)看護師(32)学生(14)OB(12)院生(7)教員(4)栄養士(10)MR(14)その他(1)
40	2014	16	80 医師(8)看護師(18)学生(11)OB(8)院生(8)教員(4)栄養士(9)MR(13)その他(1)

※期間中出入りが激しいため、必ずしも正確なデータでない可能性があります。

※(-)は資料なく不明

★サマーキャンプから生まれた研究論文 編★

小児糖尿病児の生活管理に関する研究（その 1）

～北陸小児糖尿病サマーキャンプ参加児の血糖の安定性と生活の実態～

小野ツルコ, 金川克子, 天津栄子他,
金沢大学医療技術短期大学部紀要(3)1, 69-76, 1980.

小児糖尿病児の生活管理に関する研究（その 2）

～日常生活面からみたサマーキャンプの効果について～

萩野 妙子, 小野 ツルコ, 金川 克子,
金沢大学医療技術短期大学部紀要 4 (1) , 1981.

小児糖尿病患児の登山における血糖の変動

天津 栄子, 小野 ツルコ, 金川 克子,
金沢大学医療技術短期大学部紀要, 6, 37-42, 1983.

小児糖尿病患児 7 名を対象に白山登山を行い, 運動負荷と血糖の変動と患児達の心理的反応を
検討した.

- 1) 登山 2 日間の夕食前血糖値は登山前日の夕食前値に比べ低く, キャンプ中の 8 回の FBS 平均
に比べると 49.6 mg/dl, 100.4 mg/dl の低値で二日目の夕食前値に著明に低下したが低血糖症
状はみなかった.
- 2) 運動負荷の平均は一日目 Vo2 max 55~69%と二日目 Vo2 max 48~62%と著しい差はな
く, 血糖値と相関しなかった.
- 3) 患児達は登山を通じ自己との闘い, 克服感や自然への感動を体験し, 普段出来ない運動への挑
戦が医療管理の下で行われ体力の自信を得るなど望ましい情動反応を示し登山の有する精神的
有効性を評価できた

糖尿病患児をもつ親の意識調査.

稲垣 美智子, 小野 ツルコ, 天津 栄子,
金沢大学医療技術短期大学部紀要, 8, 7-41, 1984.

北陸小児糖尿病サマーキャンプの活動とその問題点

小野 ツルコ, 天津 栄子, 稲垣 美智子, 他,
金沢大学医療技術短期大学部紀要, 9, 59-65, 1985.

北陸小児糖尿病サマーキャンプの歩み.

稲垣美智子,
厚生, 43 (8) , 30-31. 1988.

思春期における糖尿病児のセルフケア問題 親への質問紙調査を通して

西村真実子, 稲垣美智子, 真田弘美, 須釜淳子, 塚崎恵子, 平松知子, 河村一海, 津田朗子, 関秀俊
金沢大学医学部保健学科紀要, 22, 163-168, 1998.

1 型糖尿病児の学校における療養行動 療養行動に伴う困難感.

宮川しのぶ, 津田朗子, 西村真実子, 木村留美子, 稲垣美智子, 笠原善仁, 小泉晶一, 関秀俊
小児保健研究, 61 (3), 457-462, 2002.

T1DM 患児の学校生活での療養行動の実態及び療養行動に伴う困難性とその背景を明らかにするために, I 型糖尿病児 38 名 (小学 3 年~高校 3 年) を対象に調査を行った. その結果, 94.7%の児がいずれかの療養行動を行っており, そのうち, インスリン自己注射 81.6%, 血糖自己測定 44.7%, 間食・補食摂取 31.6%であり, 場所は, 小学生では主に保健室であったが, 中高生ではトイレや教室が多く, 半分の児が「しにくい」と感じていた. 困難感を抱く理由には, 医療行動を不思議がられたり, 特別視されたりによるものが多く, 又, 病気を知られたくないため我慢をし, 97.4%が低血糖の経験があった. 多くの患児が学校での療養行動に困難感を感じているため, 更なる学校現場での正しい理解と環境作りが必要と思われた.

1 型糖尿病児の学校における療養行動 病気公表の療養行動への影響.

関秀俊, 宮川しのぶ, 津田朗子, 木村留美子, 稲垣美智子, 笠原善仁, 小泉晶一, 西村真実子
小児保健研究, 61 (3), 463-469, 2002.

1 型糖尿病患者の思春期における心理的体験.

岡崎 瑞生, 稲垣 美智子
糖尿病, 5 (7), 503, 2002.

食行動における心理的特徴による若年発症 1 型糖尿病患者の類型化

(A type of youth-onset type 1 diabetes mellitus patients by psychological characteristics in the eating behaviors),

河村一海, 稲垣美智子, 佐藤豪,
金沢大学つるま保健学会誌, 9 (2), 31-42, 2006.

若年発症 1 型糖尿病患者 18 人より食行動に関するエピソードが 19 テーマ抽出された. この抽出された 19 テーマおよび患者の 4 つの背景 (性別, 年齢, 発症年齢, 糖尿病歴) の 23 変数と変数毎のカテゴリーをもとに双対尺度法による解析を行った. その結果, 3 個の解を得ることができた. 解 1 は「発達段階と関係する普通ではないことに対する思い」, 解 2 は「糖尿病であることの不安や欲求が満たされないことへの不満」, 解 3 は「食事制限に関係する親への依存と自己責任のバランス」であった. また導き出された解 1 を X 軸, 解 2 を Y 軸として 18 人の被験者の重みを 2 次元のグラフにプロットし, 類似した位置にある被験者をグループにまとめたところ, 8 グループに類型化され, それぞれのグループにより異なる特徴が示された. 以上のことは, 食行動に関する思いが成長発達や糖尿病療養そのものとも深く関係しあっていることを明確にしたと言える.

1 型糖尿病患者の心理「前向きに取り組む」ことの概念化

川東庸子, 稲垣美智子, 小泉順二

糖尿病 52 (1) Page65(2009.01)

罹病期間の長い若年発症 1 型糖尿病患者の心理

川東 庸子, 稲垣 美智子, 多崎 恵子

日本糖尿病教育・看護学会誌, 15 (1) , 4-10, 2011.

本研究は、罹病期間の長い若年発症 1 型糖尿病患者の心理を明らかにすることを目的として、半構成的面接による調査を行い、質的な手法を用いて分析した。その結果、27 サブカテゴリーから成る 10 カテゴリーが見出された。そのうちの 7 カテゴリーは周囲の人達との関わりの中で持つ心理であり、【普通を強く意識する】【劣等感を持つ】【迷惑をかけているかもしれないという負い目がある】【普通に見えることに抵抗がある】【周りの目が気になる】【大事なことは言わない】【人が離れていくのが怖い】であった。また、3 カテゴリー【注射は面倒】【他の人は糖尿病に詳しくない】【食べなきゃ倒れると思う】は、発症率の低い疾患であり注射や低血糖予防など 1 型糖尿病の特徴が強く表されているカテゴリーであった。これらのカテゴリーは、患者との面談や患者の心理的問題の予測に活用可能と考えられる。

インターネット掲示板を活用した

1 型糖尿病患者の自己管理能力向上支援方法の試作および評価

(Creation and evaluation of a method for improving self-management skills for patients with type 1 diabetes utilizing an Internet bulletin board) .

川東 庸子, 稲垣 美智子

金沢大学つるま保健学会誌、35(2),1-13,2011.

2010 年 1 月 4 日～2011 年 1 月 31 日にインターネット掲示板を開設した。参加者は、1 型糖尿病患者とその家族、医療者(医師・看護師)、研究者(掲示板管理人)である。掲示板では、患者が困っていること、血糖コントロールの工夫、専門家である医療スタッフからのアドバイスがやり取りされ、研究者は、自己血糖測定の数値を得、診察場面に同席し、データと患者の日々の療養行動に気付くような質問をする。本研究の方法の効果として、HbA1c の推移、血糖の測り方および血糖コントロールの仕方の変化、糖尿病への負担感、と面接に基づいて評価する HbA1c が研究開始時と比べて 8 ヶ月後に有意に低くなり、5 ヶ月間に渡って有意差が持続した。自己評価に関しては、書き込みをした群、していない群共に知識の獲得に効果があったが、書き込んだ群の方において、血糖の測り方の変化やコントロールの仕方の変化を自覚しているという効果があった。また、糖尿病に関する負担感情を表す 20 項目からなる糖尿病問題領域質問表(PAID)の平均得点で有意に得点が上昇したのは、「糖尿病の治療法について、はっきりとした具体的な目標がない」、「自分の気持ちや感情が糖尿病と関連しているかどうか分からない」、「常に食べ物や食事が気になる」の 3 項目であった。

★インスリン・血糖測定 of 歴史 編★

※資料提供（順不同）：日本イーライリリー株式会社 ノボノルディスクファーマ株式会社
サノフィ株式会社 株式会社三和化学研究所
株式会社アークレイ 日本ベクトンディッケンソン株式会社

※この稿の編集にあたっては、上記各社からの資料提供に加え、Web サイトなどからの情報も参考としました。金沢大学を中心とした石川県での状況を記したものであるため、全国的な趨勢とは異なることがあることをあらかじめご了承ください。また、すべての情報を網羅したものではありません。

1921年 インスリンの発見

- 1946年 中間型イソフェンインスリン（NPH）開発（ノルディスク）
- 1953年 持続型亜鉛懸濁インスリン「レンテ®」シリーズ発売（ノボ）
- 1959年 二相性インスリン「ラピタード®」発売（ノボ）
- 1959年 ブタ精製中性インスリン注「ラピタード®」発売（ノボ）
- 1967年 ノモコンポーネントインスリンを開発（ヘキスト）
- 1973年 高度精製「モノコンポーネント(MC)インスリン」発売（ノボ）

1974年 血糖測定器「デキスター」発売（エームス）

- 1974年 高度精製ブタインスリン「インスリン インストラード ノルディスク®」発売
(ノルディスク)



ノボ社のインスリンバイアル（左）とベクトンディッケンソン社のインスリン用の使い捨て注射器（右）。これが発売されるまでは滅菌のための袋に入ったインフルエンザ用の注射器が多く使用されていた。専用の注射器は針が埋め込み式となっており空気が入りにくく、また、袋がないため携帯の利便性も向上した。

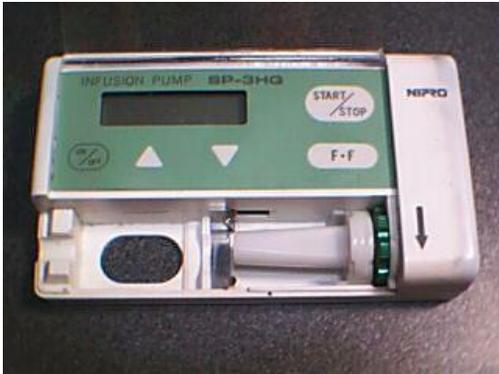


1974年に発売された血糖測定器「デキスター（左）」当時は内科病棟に1台ある程度の高価なものだった。穿刺のための専用器具はなく、一般的なランセットが用いられていた。「デキスター」はその後血糖測定器を示す代名詞となった。しかし自宅で行う検査はもっぱら「テストテープ（右）」による尿糖測定のみであった。

1976 年 アメリカにて初の装着可能なインスリンポンプ開発

1981 年 インスリン自己注射の健康保険適用

1981 年 ニプロ製インスリンポンプが日本全国で流通



難波光義らによるインスリンポンプの症例報告を踏まえ、金沢大学でも臨床試験が行われた。本体は弁当箱ほどの大きさで、留置針も金属製で痛みがあり、この時点ではコントロールが著しく不良な場合の最終手段として用いるものであり、日常生活での使用を続けるほどの実用性はなかった（編集担当者個人の印象）

1982 年 血糖測定器「デキストロメーターⅡ」発売（京都第一科学）

1983 年 血糖測定器「グルテスト」発売（三和化学研究所）



デキストロメーターⅡ
電池で駆動し表示はデジタル。持ち運べる血糖測定器の登場であった。しかし、測定には試験紙の水洗いが必要であり、また保険未適用のため個人で使用するためには機器の購入（7万円程度）が必要であった。

1983 年 遺伝子組み換えによるヒトインスリン「ヒューマリン®」の
発売（イーライリリー）



それまでは動物由来のインスリンのため長期使用により刺入部が硬くなったりする状況がみられたが、ヒトインスリンが身近に使われるようになりトラブルは大きく減少した。（写真は現行のもの）

1985年 ペン型注入器「ノボペン®」発売 (ノボ)



ノボペンの登場によりインスリン注射のスタイルは大きく変わることになった。当初はプッシュ式で注入単位に制限があったがのちにダイヤル式となり、注入量の微妙な調節も可能となった。他のメーカーからもペン型注入器が続々と発売された。

ノボペンⅢは色もカラフルで人気があったが、2011年の東日本大震災以降、非常時のインスリン調達の利便性などからカートリッジタイプの注入器は徐々に影を潜め、注入器自体を使い捨てする現行のタイプが主に用いられるようになった。

1986年 血糖自己測定 of 健康保険適用

1986年 血糖測定器「グルコスター」発売 (マイルス)



グルテスト (左)
グルコスター (右)
試験紙に付着した血液を拭き取るタイプのため、血糖測定に水が不要となった。自己血糖測定が保険適用となったこともあり自宅で血糖測定ができるようになった。
しかし測定には1分以上の時間を要した (グルテスト 120秒 グルコスター 50秒)。

1991年 血糖測定器「グルテスト」発売 (三和化学研究所)

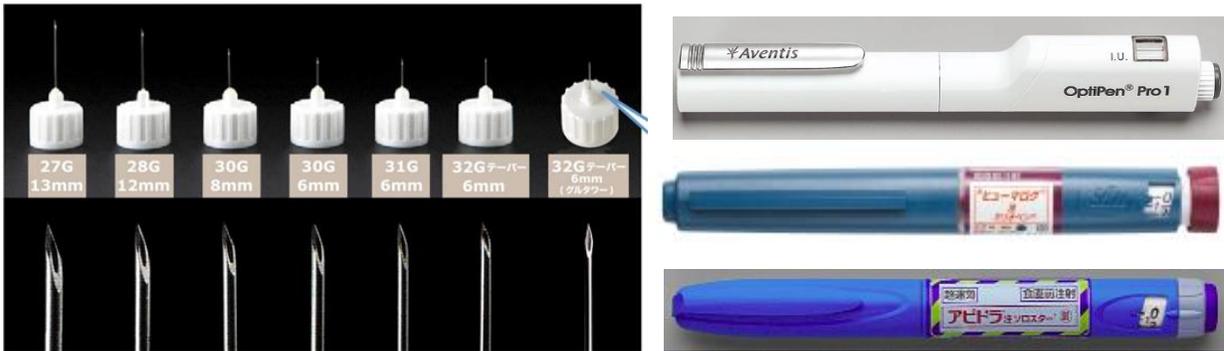
1991年 血糖測定器「グルコカード」発売 (京都第一科学)



「グルテスト」「グルコカード」はこれまでの試験紙を用いる方法から電極チップに血液を吸い取る方法に変化した血糖測定器である。必要とする血液の量は劇的に少なくなり、機械本体もポケットに入る大きさとなった。「いつでも血糖を自分で測れる」時代の到来である。

一方、機械の発達に伴い、血糖に対する「自覚症状」が希薄となり「測らないとわからない」という事態も発生するようになる。サマーキャンプではこの問題に対して「血糖を測るときには今の血糖値を予想する」という取り組みにより元来持っている「勘」に対して働きかける工夫をした。

1990 年代 強化インスリン療法の普及



- 1996 年 超即効型インスリンアナログ製剤「ヒューマログ®」発売（イーライリリー）
- 1999 年 超即効型インスリンアナログ製剤「ノボラピッド®」発売（ノボノルディスク）
- 2000 年 持効型溶解インスリンアナログ製剤「ランタス®」発売（アベンティス）

ペン型注入器の普及や、製剤の種類が豊富になるにつれ、これまで 1 日 1~2 回であったインスリン注射が 4~5 回とされることが多くなった。超即効型製剤の登場はこれまでの「食事は注射のあと 30 分」という常識を大きく変えることになった。

注入器に使用する針も細く、短くなり、痛みの少ないものが開発されていった。

一方、注射回数の増加は、子どもたちの生活の中で「学校での注射」という新たな課題をうむことにもなった。

2003 年 ミニメド 508 インスリンポンプ発売（日本メドトロニック）



ミニメド 508 の登場により、金沢大学を中心とした石川県でもインスリンポンプ療法が普及することになった

- 2004 年 超即効型インスリンアナログ製剤「アピドラ®」発売（アベンティス）
- 2004 年 持効型溶解インスリンアナログ製剤「レベミル®」（ノボノルディスク）
- 2007 年 パラダイムインスリンポンプ 712 発売（日本メドトロニック）
- 2010 年 パラダイムインスリンポンプ 722 発売（日本メドトロニック）
- 2013 年 インスリンポンプ TOP-8200 発売（トップ）
- 2013 年 持効型溶解インスリンアナログ製剤「トレシーバ®」発売（ノボノルディスク）
- 2015 年 持効型溶解インスリン遺伝子組換え注射液「ランタス XR 注ソロスター®」発売

（サノフィ）



パラダイム 722（左）と TOP-8200（右）
カーボカウントによるインスリン注入量の決定に
対応した



2015 年 SAP タイプインスリンポンプミニメド 620G システム発売 (日本メトロニック)



アメリカから約 10 年遅れて、日本でも血糖測定のリアルタイム機能を持つポンプが使用できるようになった。センサーの信頼性など解決すべき課題はあるものの、「起きて活動している時間」の過ごし方を大きく変える機器の登場である。

2015 年 今では血糖測定器もこんなにバラエティー豊かです



(株)三和化学研究所

(株)アークレイ

テルモ(株)



おまけ
1986 年(第 12 回)キャンプの写真から。
(左)当時はじめて発売された穿刺器具を使用している様子。中央下にも置かれている。
(右)失敗すると「流血事件」になった(泣)

写真でつづるサマーキャンプの40年

※これ以降のページには、個人を特定する写真が多く含まれておりますので、
Web上の掲載するにあたって削除しております※

編集後記

関係者のみなさま、大変お待たせいたしました。サマーキャンプ 40 周年の記念誌を、やっとお手許にお届けできるようになりました。資料や原稿を寄せていただいたみなさま、ありがとうございました。

「なぜ 50 周年でなくて 40 周年なの？ ちょっと区切りが悪くない？」という疑問をお持ちの方も多数おられるでしょう。確かにその通りです。しかし、事の真相は「20 周年の時に記念誌を作ろうと思いついたが、完成するのに 20 年も時間がかかってしまった。。。。」ということなのです。構想 20 年。その間にもサマーキャンプは確実に歴史を積み重ねていたのであります。

今回記念誌をまとめるにあたり、金沢大学の糖尿病ケア研究室のみなさまの協力をいただいて過去の資料を整理しました。多くの資料を通じて、サマーキャンプが非常に多くの方々の「思い」に支えられていることを改めて実感しました。この記念誌がこれらの「思い」をこれから伝えていくひとつの手掛かりになればと念じております。

と同時に、少し後悔することもあります。それは、時間の経過にともなって貴重な資料にすでに失われてしまっている部分があるということ。構想 20 年なんて悠長なことを言っていないで、なんとかしてもっと早く形にしなければならなかったな、と思っています。

ちょっと後悔の部分をリベンジすべく、図々しくも最後にみなさまにお願いをさせていただきます。サマーキャンプのしおりやパンフレットなど「昔の資料」をお持ちの方、ぜひご連絡ください。資料は電子化して保存の上、現物は責任をもってお返しします。ご協力いただける方はサマーキャンプ運営委員会事務局までご一報ください。ご連絡をお待ちしています。

(北陸小児糖尿病サマーキャンプ 40 周年記念誌 編集委員会 光田雅人)

北陸小児糖尿病サマーキャンプ 40 周年記念誌

～ Since 1975 to 2014 and Forever キャンプはいつもここに～

編集委員会 光田雅人 原井伸子
 稲垣美智子 多崎恵子 松井希代子 堀口智美
資料管理担当 光田雅人

2016 年 4 月発行

発行 北陸小児糖尿病サマーキャンプ運営委員会
代表 稲垣美智子
金沢大学医薬保健研究域保健学系
金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻
〒920-0942 石川県金沢市小立野 5-11-80